

な一箇年であつた。國民自由主義労働者政策の臍腫は、ヨーロッパの大多數の社會民主主義黨を窒息させ、そしてこの潰瘍は解黨派の中にも爛熟し切つてゐるように見える、——それなのに當人どもは——クリロフのお伽話に出てくる樂隊のように——座席を代へて合唱しながら頓珍漢な音調で以て、口をそろへて嘶やし立てた、協同一致、協同一致と……（『ナールシエ・ディエーロ』との）！

パリの『ナールシエ・スラヴ』の手本は、協同一致の正直な信奉者にとつて特に教訓的である。組織委員會の『イズヴェスチヤ』第二號は『ナールシエ・スラヴ』に致命的打撃を與へた。そして今ではその死は（政治的死であらうと「生理的」死であらうと同じことだ！）たゞ時間の問題である。『イズヴェスチヤ』第二號は『ナールシエ・スラヴ』を次ぎの簡單な報道で以て殺したのである。曰く、マルトフ（彼れは組織委員會總務の地位を占めてゐたものゝようである——彼れは今後『ファルヴェルツ』が死んだなどといふ不謹慎な放言はしないことを多分應諾したので、ゼムコフスキーとアクセルロッドによつて明らかに「満場一致」で選出されたのだ）、このマルトフと、組織委員會に組織上加入してゐる『ナールシエ・スラヴ』同人中の半分とが、これまで單なる無邪氣な心から（初心娘

に扮したマルトフ——悪くはない！）『ナールシエ・スラヴ』をロシアのインタナショナル主義者の『共同機關紙』と考へてゐたことの誤謬であることを悟つた。事實は『ナールシエ・スラヴ』は「異端的」な且つ「分派的」な（ゼムスキーは自分からこれに附加して曰く——『アナルコ・サンヂカリスト的』な）正體を現はし、レーニンの『ゾチアル・デモクラット』に對して「言譯け的」な態度を取つてゐるのだと。

かくて七八箇月の間何の効果もなく結合してきたところの、『ナールシエ・スラヴ』の三つの部分が公衆の前に現れてゐる。一、正直にインタナショナル主義に同感し、『ゾチアル・デモクラット』に傾いてゐる二名の左翼的編輯部員。二、マルトフと組織委員會の人士（優に半数の人々）。三、トロツキー、これはいつものように主義の上からは何等排外社會主義者と一致してゐないが、實踐の上ではあらゆる點で彼れ等と一致してゐる（因みに、これはチヘイゼ一派の「仕合せな仲介」——外交家の用語ではそう言ふではないか？——のおかげである）。

協同一致の眞卒な擁護者にとつては次ぎの疑問が起る。曰く、何故に『ナールシエ・スラヴ』は破産して分裂したか？ 普通に人はこの分裂を、邪惡なる『レーニン主義者』の陰險な分裂傾向を

以て説明してゐる（『イズヴュスチヤ』第二號所載ゼムコフスキーの論說、『ナーシ・スラヴァ』紙上の阿克セルロッド等）。だがこれらの邪惡なる人士は勿論『ナーシ・スラヴァ』の同人になつたことはないのだ、この簡単な理由から見ても、分裂したり脱退したりできる筈はなかつた。

原因は何にあるだらうか？ 偶然だらうか？ それとも社會民主主義労働者と、『ナーシ・スラヴァ』中のブルジョア的影響の傳播者（従つて事實は、自由主義および排外主義ブルジョアジの代理人）との協同一致が、不可能なためだらうか？

『協同一致』の信奉者はこの點について反省して貰ひたい。

西ヨーロッパの社會民主黨では、今日カウツキーやハーゼがベルンスタインと共に、これと幾分違つた環境と形式とにおいて『協同一致』に賛成を明言した。これらの『權威者』は大衆が左翼の方に轉向したのを感じてゐるので、シューデクム一味と暗黙に提携しつゝ左翼社會民主主義者に提携を申込んでゐる（八月四日（戦争勃發の日）の政策を言葉の上で拋棄し、國民自由主義労働者政策と社會民主主義労働者政策における扞格を、何物にも義務を負はないところの（そして或る點では、ヒンデンブルグやジ・フル將軍にとつてそんなに不利でもないところの）空文句で以

て、『媾和』を主張する空文句で以て（媾和の標語はその目的のためには打つて付けだ）、領土併合のプラトンの否認で以て、糊塗しようとしてゐる。これが大體カウツキーやベルンスタインの筋書なのであつて、この筋書は『リュマニテ』紙の二三の覺書からも分かるように、フランスの排外社會主義者にもお氣に召さないものではないのである。獨立労働黨のイギリス人は、左翼に對するおべつかによつて態度を胡麻化しながら、勿論排外社會主義の大赦のために熱心に奔走するだらう。オー・カー（組織委員會）の人士やトロツキーは、言ふまでもなく神様御自身から、カウツキーとベルンスタインの裾に拜跪するように命じられてゐるのだ。

吾々は日和見主義者の指導者と、『急進派』陣營の偽善的排外主義者の指導者とが、このように左翼に變節するのを一つの喜劇と見做すものであつて、この喜劇の意義は、社會民主黨におけるあらゆる腐敗を、左翼に向つて會釋することによつて救済せんとすること、事實上國民自由主義労働者政治を『左翼』（言葉の上の）に極く僅かばかり讓歩することによつて鞏固にしようとすることに存する。

ヨーロッパの客觀的狀勢は次ぎの如きものである。即ち大衆の間には失望、不満、反抗、憤激、×

ヨーロッパ聯邦の標語について

一九一五年八月二十三日。(『ソチアル・デモクラット』第四四號所載。)

『ゾチアル・デモクラット』第四〇號において、吾人は『ヨーロッパ聯邦』なる標語の検討を、問題の經濟的方面が紙上において説明されるようになるまで延期するといふ、わが黨の國外部の決議を報じた。

この題目に關する討論は、わが會議の議上では一面的な政治的性質だけを帯びた。さういふことになつたのは、恐らく部分的には、中央委員會の宣言において、この標語が直接に政治的標語として約示されたためであつて（そこでは『當面の政治的標語について……』『云々と述べてある』）その際ヨーロッパ聯邦共和國といふことが力説されてゐるばかりでなく、『ドイツ、オーストリア、ロシアの王制の×××××なしには』この標語は無意味にして且つ虚偽だといふことが高調されてゐる。

この標語の政治的評價といふ圈内において、かゝる問題の提出に對して反對論をするものがあるれば全然間違つてゐる——たとへば、この標語は社會主義××の標語を排除するだの、弱めるだのといふ見地から反對するが如きはさうである。本統の民主主義的精神における政治的改良、況んや ××は、如何なる場合においても、如何なる條件の下にあつても、決して社會主義×

×の標語を排除したり弱めたりできるものではない。反對に、それは ××を近付かせ、

そのための土臺をひろげ、小ブルジョア團および半プロレタリア分子といふ新たな層を闘争に引き入れるものである。しかし他面においては ××は、不可避的に ××の徑路にあ

るものであつて、後者はただ一つの行爲と見做すべきでなく、××××××××××××××××××、

×××××、×××××××××××、××××××××××××××××××、×期と見做すべきものである。

だがヨーロッパ聯邦なる標語を、ヨーロッパの最も反動的な三王國——ロシア王國を先頭にして——における××××××と關聯させて、政治上の標語として觸れることは茲に許されなくとも、この標語の經濟上の内容とその意義についての、極めて重要な問題がまだ残つてゐる。帝國主義の經濟的諸條件、即ち資本輸出並びに『進歩的』『文明的』植民國家間における世界分割といふ見地から見れば、ヨーロッパ聯邦は資本主義の下においては不可能であるか、反動的であるかである。

資本は國際的且つ獨占的になつてゐる。世界は小さな一塊の大強國、即ち諸民族の大掠奪および壓迫に最大の成功を見てゐる國家の間に分配されてゐる。ヨーロッパの四大強國、イギリス、フ

ランス、ロシア、ドイツ（二五〇—三〇〇百萬の人口と、約七百萬平方キロメートルの總面積とを有する）が、殆んど五億（四九四・五百萬）の人口と、六四・六百萬平方キロメートルの面積、即ち殆んど地球（兩極地帯を除いて一三三百萬平方キロメートル）の半分を左右してゐる。それに加ふるに、今日『解放戦争』を行つてゐる強國、即ち××、ロシア、イギリス、フランスのために現在寸斷されてゐる三つのアジア國家——支那、トルコ、ベルシヤがある。この三つのアジア國家は、これを半植民地と名づけ得るものであるが（實際は九分通り植民地である）、三六〇百萬の住民と一四・五百萬平方マイルの總面積（ヨーロッパ全體の總面積の一倍半）を有してゐる。

更に、イギリス、フランス、ドイツは外國に少くとも七百億ルーブルの資本を投下してきてゐる。この總額から『適法』の収益（三十億ルーブル以上の年収益）を擧げるために、××と名づけられ、を左右してゐるところの、百萬長者の全國委員會が用をつとめ、植民地および反植民地に向つて『主君たる資本』の脊屬を『放資』してゐる——領事および副領事、大使、あらゆる官吏、その他幾多の として。

最高度に發達せる資本主義の時期において、小さな一塊の強大國による約十億の住民の掠奪は

このように組織されてゐるのである。だが資本主義の下においては、それ以外のどんな組織も不可能であらう。植民地、勢力範圍、資本輸出を抛棄せよといふのか？ そんなことを考へるのは、日曜日毎にキリスト教の有難味を説教して、貧者に對して……二十億ルーブルではなくとも少くとも年に二三百ルーブルを施與するように勧める小坊主の水準に低下することにならう。

ヨーロッパ聯邦は、資本主義の下においては植民地の分配と同意義である。しかるに資本主義においては、権力以外による如何なる分割の原則も、如何なる基礎も不可能である。十億萬長者同志が資本主義國の『國民的収入』を分配するのには、資本の割合（それに加ふるに、最大の資本は自己に屬するよりもヨリ多くを受取るといふ原則が附加される）に従ふより外にあり得ない。資本主義とは生産手段の私有並びに生産の無秩序を意味する。こゝにいふ基礎の上に収入の『公平』なる分配を説教することは、ブルードン主義であり、小ブルジョア的および俗物的馬鹿話である。權力に應じて分配する以外に方法はあり得ない。そして權力關係は經濟的發展の進行と共に變化する。一八七一年以來ドイツはイギリスやフランスよりも、三倍も四倍も急速に力を加へた。そして日本は——ロシアよりも十倍も急速に。資本主義國の實力を吟味するには、戦争以外に方法

がないし、またあり得ない。戦争は私有制度といふ基礎に反抗する矛盾でなく、この基礎の直接且つ不可避的な結果である。資本主義の下においては、個々の経済および個々の國家的發展が、平均的に増進することは不可能である。資本主義の下においては、時々破壊される平衡を再建するに、産業における恐慌と、政治における戦争以外に方法がない。

如何にも資本家間や強國間の一時的協調は全く可能である。この意味においてはヨーロッパ聯邦も可能である、即ちヨーロッパの資本主義國家の協調として可能である……何のための協調か？勢力を併せてヨーロッパにおける社會主義を壓迫し、また強奪せる植民地を日本およびアメリカに對して防護するための協調である。この兩國は現在の植民地分配に除けものにされてをり、且つ過去半世紀において、停滯的な王制的な、すでに老衰せるヨーロッパに比して著しく優勢になつてきたものである。アメリカ合衆國に比すれば大體においてヨーロッパは停滯を意味する。今日の經濟的土臺においては、即ち資本主義の下においては、ヨーロッパ聯邦はアメリカの最も急激なる發展を阻止するための反動を意味することになる。民主主義および社會主義の問題が、専らヨーロッパだけに結びついてゐた時代は、何と言つても過ぎ去つてゐる。

(ヨーロッパのみではなくは、吾人が社會主義と結びつけるとこの、諸國民の糾合および自由の國家形態——××××の完全なる勝利が、あらゆる××、××××××××あらうとも)の××に導くまでの間の——である。しかしながら なる標語は決して正當ではあるまい。何故なら、一、この標語は社會主義と混合するから、二、この標語は一國における

不可能だといふ間違つた見解、並びにかゝる一國と爾餘の諸國との關係についての誤つた見解を惹起するからである。

經濟的および政治的發展の不均等性は、資本主義の争はれぬ法則である。そこからして、最初に二三の國、否、ただの一國における××××××××は可能だといふことになる。(以下原文十二行省略)。

右の論據によつてわが黨の機關紙編輯部は、ロシア社會民主労働者黨の國外支部會議におけるこの問題のあらゆる方面の論議の後に、ヨーロッパ聯邦なる標語は不當であるといふ結論に達したのである。

一 フランス社会主義者の正直な聲

一九一五年。(『コミニト』第一一二號所載。)

親佛排外主義がおそらくフランスにおけるよりも幾分力弱いフランス語系スキスで、或る正直な社会主義者の聲が聞えてゐる。最も賤しむべき今日の時代においては、このことは全く特異な事件である。そしてこゝに指すのは、典型的フランス的な——もつと正確に言ふなら、ラテン的な、といふのは、たとへばイタリア人も精密にそうなのだから——氣質と考へともつた一人のフランス人なのだから、吾人は一層注意深くこの聲に耳を傾けねばならぬ。

こゝに擧げるのは、ローザンヌにおける或る小さな社会主義新聞の主筆ポール・ゴン！の小著である。著者は一九一五年三月十一日にこの都市で、『死しつゝある社会主義と復活すべき社会主義』といふ題で講演を行ひ、次いでこれを單行本にして出版した。『一九一四年八月一日に戦争が燃え立つた。今日有名となつたこの日附の前後一週間といふものは、幾百萬の人々が期待してゐた。』著者はそう書き出してゐる。幾百萬の人々は、社会主義指導者の決議と聲明書とが『犯罪的××をその渦巻の中に投げ込むところの力強い××』を誘致しはしないかと期待してゐた。だが幾百萬人の期待は欺かれてしまつた。ゴレーは言ふ、吾々は『戦争が電光石火的に不意に起つたこと』と、情報が缺けてゐたことによつて、社会主義者の態度を『友朋的』に是認しようと試

みたが、この是認は吾々を満足させなかつたと。『吾々は多分良心が、曖昧と虚偽との濁り水の中に浸されたものとは感じなかつたのだ。』讀者は右の言からだけでも、ゴレーが公明な人間であることを見抜くことができる。これは現今の時代では殆んど異常な性質のものである。

ゴレーはプロレタリアートの『革命的傳統』を説いてゐる。彼れは『それぞれの状態にそれぞれの適應せる行動がある』ことを充分に意識し、『特別な状態には特別な處置が必要である。醫藥だつてもその場合の病氣に順應したものでなければならぬ』と説いてゐる。また『直接に大衆に向つて×××および×××行動を喚起する』『大會決議』のことを想起してゐる。それに續いてシ、ツットガルトおよびバーゼル決議中の、右に該當する章句を引用してゐる。そして『これらの各決議は、攻撃戦だの防禦戦だのに關する考察を毫も含まず、従つてまた一般に承認されてゐる根本原則の代りに國民主義的戰術を毫も提供しない』ことを力説してゐる。

こゝに至つて讀者は、ゴレーが實に公明であるばかりでなく、確信ある正直な社会主義者であることを認めらう。これ位の特質ですらも『第二インタナショナルでの名士』の間には、既に稀有になつてゐるのである！

『プロレタリアートは軍事的頭目から敬意を表され、ブルジョア新聞は『國民精神』と名付けたものゝ發揮を熱心な文句で以て賞讃してゐる。この發揮は吾々には三百萬圓の屍を値ひするものである。』

『しかも——勞働者組織が今日のように多數の成員に達したことは嘗てなく、今日のように澤山の代議士、今日のように新聞雑誌の優秀なる組織が存在したことは嘗てなかつた。しかも今日のように吾々が卑しむべき事柄に當面しなければならなかつたことは嘗てなかつた。』

『幾百萬の人間の存在に關するこのような悲劇的な事態の下にあつては、あらゆる×××は許されるばかりでなく、さるべきである。それは、される以上に、さるべきである。プロレタリアートは、ヨーロッパに鮮血を漲らせてゐる出來事から、わが時代の生靈を救ふために、如何なる困難事をも試みることを要望した。』

『然るに力強い所業も、×××××××××××××××もなかつた……。』

『吾々の敵手は社會主義の崩壞について罵詈雑言してゐる。彼れ等はこのことについて氣が早やすぎる。しかも彼れ等の言が一から十まで當つてゐないとは、誰れが敢へて主張できよう。現在死ん

でゐるものは社會主義一般ではなく、社會主義の或る一つの亞種、理想主義の精神も熱情もなく、官公吏の風習と安樂な家長の肥腹とをもつた、口さばりのよい社會主義、大膽と勇猛心とをもたぬ社會主義、資本主義との友誼的協定で十重廿重に取巻かれてゐる統計愛好者、専ら改良を事として、扁豆ちぢまめの莢あつちりのために家督權を賣つた社會主義、ブルジョアジーのために民衆の焦慮の抑制者たる役を演じ、プロレタリアートの大膽なる行動に對する一種の自動制動機たるはたらきをしてゐる社會主義が、んだのだ。』

*アブラハムの子イサクの長子エサウは、弟ヤコブの煮たる扁豆ちぢまめの莢あつちりを得んがために、おのが家督の權を弟に賣つた。(創世紀第廿五章二九以下參照——譯者。)

『インタナショナル全體に感染する危険のあつた此の種の社會主義こそは、吾々が無力、無氣力を非難されてゐるのに對して、或る程度まで責任があるのだ。』

小冊子の別の箇所ではゴレーは公然と『改良社會主義』と『日和見主義』とを、社會主義を柱げたものと説いてゐる。

ゴレーはこの狂説について語り、すべての交戦國のプロレタリアートの『共同責任』を認め、

『この責任は、大衆が信頼を置いて合言葉を出してくれるのを期待してゐた指導者にある』ことを力説してゐる。次いでゴレーがその例として、最もよく組織され、最もよく形態がとゞのひ、最も最も教理に充たされてゐるところのドイツ社會主義を擧げてゐるのは全く正當であつて、彼れはその數的力強さと 弱さを「指摘」してゐる。

『ドイツ社會民主黨が 精神に鼓吹されてゐたなら、 企圖に對してハッキリした頑強な抵抗を行ふことを得て、中歐諸國のプロレタリアートをこの唯一の救ひの道に誘致することができたであらう。』

『ドイツ社會主義はインタナシヨナルの間に大きな勢力を持してゐた。それは一番多くの事柄を成就することができた。ドイツ社會主義は最大の努力を期待されてゐた。しかしながら人身的精力が餘りに厳格な紀律によつて弱められてゐる場合、または『指導者』が勢力を利用して、出費を最低限度にとゞめることを志してゐる場合は、數の上の力は無にひとしい。』(この命題の第二の部分は正しいが、第一の部分は不當である。紀律とは、仇やおろそかにならぬものであり、必要なものである——たとへば、あらゆる日和見主義者と×××行動反對者とを除外する黨の紀律

の如き。)『ドイツ・プロレタリアートは責任ある指導者のおかげで、軍閥帝政黨の聲に従つた……インタナシヨナルのその他の各國支部も恐れおのゝいて、それと全く同じことを行つた。フランスでは二人の社會主義者がブルジョア政府に参加することを必要と考へ、かくて社會主義者は××××××××。ことを罪惡と考へるといふ嚴肅なる大會聲明書の數箇月後に、××××××××××××の中に捉致して、非常に猛烈に、非常に熱心にこの罪惡を實行し、そのために資本家ブルジョアジーと××とは彼れ等に對する敬意を繰返へし表明したほどである。』

しかもゴレーは『死しつゝある社會主義』を容赦なく糾弾するにとゞまらない。いな、彼れはこの死を惹起したところのものに對して、また死しつゝある社會主義に代はるべき社會主義に對して、絶對的な理解を示してゐる。『各國の勞働大衆は、ブラジリアの危機中にひろがつてゐる諸觀念の影響を或る程度まで蒙つてゐる。』『ベルンスタインが一種の民主主義的改良を修正主義の名の下に要約したとき、カウツキーは凱切なる事實を擧げて彼れを反駁した。』『ところが面目が立つた後は黨は依然として舊來の『現實政策』を繼續した。社會民主黨は今日の如きものとなつた。立派な組織。力強い肉體。しかし精神はその肉體を棄て、しまつた。』ドイツ社會民主黨だけ

でなく、インタナショナルのすべての支部もこの傾向を示してゐる。『役員数の増大』は或る種の結果を惹起してゐる。黨費の醸出が規則正しく行はれることにのみ目標が置かれてゐる。ストライキは『資本家とのヨリ好い協定を結ぶことを目的とする意志表示』と見做されてゐる。『労働者の利益を資本家の利益に結びつけ』、『労働者の運命を資本主義そのものゝ運命に従属させ』、『他國の産業に不利益を與へて自國の産業の發達の増進を望む』ことが慣はしとなつてゐる。

帝國議會代議士エル・シュミットは或る論説にこう書いた、労働組合によつて労働条件を調整することは資本家にとつても有利である、けだしこの調整は經濟生活の中に秩序と安定をもたらし、資本家の勘定を容易ならしめ、競争を防止するからであると。

ゴレーはこのシュミットの言を引用して叫んで曰く、『故に組合運動が資本家の利潤をヨリ安定的ならしむることを名譽としなければならぬ！ 故に社會主義の目標は資本主義制度そのものゝ存立と協調する最大限の利益を、資本主義社會の圏内で要求することにある！ そうだとすると吾々は一切の原則の抛棄に當面することになる。プロレタリアートは資本主義制度の確立に向つて努力するのではなく、賃銀労働に有利な最低限度の諸條件の獲得に向つて努力するのではなく、X

XXXXのXXXXXXXXXXXXXXXとに向つて努力するのだ。』

『大きな組織體の幹事は重要な人物になりつゝある。然るに政治運動では代議士、文筆家、學者、辯護士、その他自己の知識を或る個人的功名心と結合させてゐる一切の人士が、特に危険な勢力を持してゐる。』

『労働組合の有力な組織としての充滿せる基金とは、組合員の中にギルド的精神を發達させる。それ自體としては改良主義的なものである組合運動の消極的方面の一つは、組合運動が賃銀労働者の地位を、個々の層または分層に應じて改善して、或る層を他の層よりも好い條件の下に置く點である。これは本來の統一を破壊し、よい條件の下にある分子の間に、自分等の地位や基金や『財力』に致命的となるおそれのある『運動』を逡巡するところの、小心翼翼たる精神を惹きおこす。こういう具合にして労働者の間に種々の範疇が分れるようになる——これらの範疇は組合運動そのものによつて人爲的に惹起されたものである。『これは勿論強大な組織に反對する論據として擧げてゐるのではない』と、著者はおそらく或る種類の『批評家』の非難を豫想して言つてゐる。これは單に組織體に情熱の『精神』の必要を立證するものにすぎぬと。

『明日の社會主義が他と區別さるべき特質は如何なるものだらうか？ それは國際的な、非妥協的な反抗的なものであるたらう。』

『非妥協性は一つの力である』——そしてゴレーは『教理』の歴史を一瞥するよう讀者にすゝめて曰く、『教理は如何なる時に勢力を及ぼしたか？ お上みに手なづけられた時だらうか、それとも非妥協的だつた時だらうか？ キリスト教は如何なる時に價値を矢墜したか？ コンスタンチン大帝がキリスト教に收入の道を與へ、迫害と死刑との代りに廷臣の禮服を提供した時ではなかつたらうか？……』

『或るフランスの哲學者はこう言つた、美々しい式服をまとひ、活氣なく勇氣なき思想こそは生命なきものである。あらゆる方面に渡りをつけてゐるが故に、そして俗物の大軍隊の行季類の一部を形づくるが故に生命なきものである。驅進し、反抗をひき起し、或る部分には不満、憤激、興奮を、他の部分には熱情を喚起する思想こそは力強いものである。『著者は確信の『頑強さ』がすべて缺けてゐる社會主義者に、現代の此くの如き事實を想起させることを、必要缺くべからざるものと考へてゐる。』

非妥協、××への用意は『決して夢想を誘致するものでなく、反對に行動を誘致するものである。社會主義者は如何なる形態の活動をも忽せにしないだらう。彼れ等はその時機の欲求と條件とに適應するところの、新たな形態を見出すことを心得てゐるだらう。……彼れ等は即刻の改良を要求する。敵と取引することによつて達成するのではなく、熱情と勇氣とに充たされた大衆によつて××××××××××××、××××××の讓歩として、これを行ふのである。』

マルクス主義および社會主義が、ブレハノフ、カウツキーおよびその一味によつて、かくも厚顔無恥なる侮辱を受けた後に、ゴレーの小冊子が現はれたのを見て、人々は本統に救はれた氣もちになる。たゞ二つの缺陷をこの小冊子は伴つてゐる。

第一に、ゴレーはラテン系社會主義者——今日のゲード主義者もその御他分に洩れない——の多數と同じく、『教理』即ち社會主義の理論を輕視してゐる。彼れはマルクス主義に對して周知の偏見を抱いてゐる。即ちその偏見は『ノイエ・ツァイト』におけるカウツキーや、一般にドイツ人の間に、現在マルクス主義の劣等極まる烏羽繪が行はれてゐることにその根據があるのだが、そういう偏見は勿論是認さるべきものではない。誰れでもゴレーと同じく、改良主義的社會主義の

主義」が非妥協的なものであることを欲してゐる。だがブルジョアジーにとっては、プロレタリアートがブルジョアジーと直接に妥協しようと、乃至は労働者運動内部のブルジョアジーの従属者、擁護者、代理人、即ち日和見主義者の媒介を通じて間接に妥協しようと、全然同じことではないだらうか？ 加之、後者の方はブルジョアジーにとつて一層便利である、けだしそれはブルジョアジーが労働者に對して永久的に勢力を保持することを保護してくれるからである！

死しつゝある社會主義と復活すべき社會主義とが存在すると、ゴレーが言つてゐるのは幾重にも正當である。だがこの死滅とこの復活とは、日和見主義に對して假赦なく戦ふことを意味し、觀念上の闘争のみならず、この醜い瘤を労働者黨から引き離すこと、この非プロレタリア的戰術の代表者を組織體から排除すること、彼れ等から完全に分離することを意味する。彼れ等は生理的にも政治的にも死なないであらう、しかし労働者は彼れ等と絶縁し、ブルジョアジーに對する諂媚の墓穴に彼れ等をつき落とし、彼れ等の腐朽を實例として、新しいゼネレーション、もつと正確に言へば××

新しいプロレタリア 教育するだらう！

イタリアにおける帝國主義と社會主義 (覺書)

一九一五年。(『コミニスト』第一二號所載。)

現在の帝國主義戦争が社會主義に向つて提供した諸問題を解明するには、種々のヨーロッパ諸國を一瞥して、種々の國民的更改と總體的形像の諸々の個性性を、本質的なもの、基礎的なものと區別することを學ぶのは無駄なことではない。兩側から見れば一層よく見ると言はれる。だからイタリアとロシアとの類似が僅小であればあるほど、この兩國における帝國主義および社會主義を比較することは、或る點ではそれだけ興味がある。

この覺書では、この問題に關して開戦後公けにされたブルジョア大學教授ロベルト・ミケルスの著『イタリアの帝國主義』と、同じく社會主義者バルボニの著『インタナショナル主義が階級的國民主義か』とが供給する資料を擧げるだけにとどめたい。おしやべりのミケルスは、この場合も彼れの他の著書におけると同じく、相變らず皮相的である。彼れは帝國主義の經濟的方面に殆んど觸れてゐないが、この書物の中には、イタリア帝國主義の起源に關する貴重なる資料と、今日の時期の本質を成してゐるところの、そして特にイタリアに明瞭に現れてゐるところの推移、即ち國民的解放戦争の時期から 反動的帝國主義戦争の時期への推移に關する、同じく貴重なる資料が蒐集されてゐる。オーストリアの羈絆から脱したイタリアは革命的民主主義的、即ち

革命的ブルジョア的であつた。然るにガルバルヂ時代以來のイタリアは、茲に吾人の眼前において、究極的に、他民族を壓伏しトルコとオーストリアとを掠奪するイタリアに變じてゐる。即ち自分等もまた獲物の分配を許されたといふ喜びで涎を流してゐるところの、野鄙な不愉快な反動的な、穢ないブルジョアジのイタリアに變じてゐる。嗜みのよい大學教授の御他分に洩れず、勿論ミケルスもブルジョアジに對する自分のおべつかを、『科學的客觀主義』と考へ、この獲物の分配を『まだ弱小民族の手中に残つてゐる大陸の分割(第一七九頁)』と名づけてゐる。ミケルスは、あらゆる植民地政策に反對の態度をとる社會主義者の立場を、『空想的』と輕蔑して斥け、イタリアは『第二番目の植民強國とならなければならぬ』人口の稠密と國外移住運動の勢ひから見て、イギリスにだけ首位を讓つて差支へないと信じてゐる人々の論據をそのまま繰り返してゐる。しかしながらイタリアでは人口の四割が文盲者だといふこと、イタリアでは今日に至るまでなほコレラ騒動が現はれてゐるといふこと——その他そういう論據はイギリスの例を持つてくることで論破されてしまふ。十九世紀前半にイギリスのブルジョアジが、かくも見事に今日の植民強國の礎を据えた時分は、イギリスは勞働大衆の非常な貧困、窮迫、飢餓の國であり、アルコ

トル中毒、貧民窟における非常なる貧窮と不潔との國ではなかつたか？

そしてブルジョア的立場からしても、この立論は反駁すべからざるものと言はなければならぬ。植民地政策と帝國主義とは資本主義の病的な、恢復し得る脱線では決してなく（俗物とカウツキとはそうだと信じてゐる）、資本主義そのもの基礎の不可避的な結果である。個々の企業間における競争は問題を次ぎの形でのみ提出する、曰く、自分が減びるか、他を減ぼすか。各國間における競争は問題を次ぎの形でのみ提出する。曰く、いつまで他國の驥尾に附して永久にベルギーの運命に當面するか、それとも他國を減ぼしてこれを占領し、強國の間に地位を確保するか。

イタリア帝國主義は『貧民帝國主義』(L'imperialismo della povera gente)の名を受けてゐる、——イタリアの貧乏とイタリア移民の絶望的窮迫とに由来するものである。イタリアの排外主義者アルツィロ・ラブリオラ、この人間が以前に彼れの敵手だつたブレハノフと異るところは、前者は後者よりも少しばかり早く排外社會主義を表明してきたといふ點、そしてこの排外社會主義に、小ブルジョア日和見主義を通してではなく、小ブルジョア半無政府主義を通して到達したといふ點だけである。このアルツィロ・ラブリオラがトリポリ戦争に關する小冊子に次ぎの如く書いた——

『吾々は單にトルコ人に對して戦ふばかりではなく……弱小民族が身動きしようとするをも、鐵の如き專制の正體を暴露するような一言を發することをも許し得ない金權ヨーロッパの奸計、威嚇、貨幣、軍隊に對して戦ふものである。』(第二二頁。)そしてイタリア國民主義者の指導者コラデーニは次ぎの如く説いた、『社會主義はプロレタリアートをブルジョアから解放する方法だつたと同じく、國民主義は吾々イタリア人にとつては、吾々に對してブルジョア的たる地位にあるフランス人、ドイツ人、イギリス人、南北アメリカ人から吾々を解放するための方法たるであらう。』

『吾々』よりもヨリ多くの植民地、資本家、軍隊を有してゐる國は、いづれも『吾々』から或る特權、或る利潤または剩餘價值を奪ひ取る。個々の資本家間では、比較的良い機械をもつてゐるか、乃至は或る獨占權を所有してゐる資本家が一番多くの剩餘價值を受取ると同じく、國々の間でも、經濟上一番良い位置にある國が最大の利潤を獲得する。自國の資本の特權のために戦ふこと、そして他國を掠奪する『權利』のための帝國主義闘争を民族的解放闘争と僞稱することによつて、國民または人民を（ラブリオラやブレハノフの力をかりて）迷はすこと——それはブルジョア

ジのする事である。

トリポリ戦争まではイタリアは他民族を掠奪しなかつた——少くとも大した規模では掠奪しなかつた。これは國民的自負心にとつて耐え難き恥辱ではないか？ イタリア人は他國民から壓服され卑しめられてゐる。イタリア人の國外移住は前世紀の六〇年代には年に約十萬人を算へてゐたが、今日では五十萬人から百萬人に達してゐる。そしてそのすべてが、文字通りの飢餓のために國土から逐はれる乞食であり、すべてが最も給料の安い産業部門のための勞働供給者であつて、この全集團が歐米都市の最も狹隘な、最も貧窮な、最も不潔な區域に居住してゐるのである。外國に生活してゐるイタリア人の數は、一八八一年には百萬に上り、一九一〇年には五百五十萬に上つた。そのうちの大集團は富裕な『大』國に赴き、その國に對してはイタリア人は最も野鄙な、赤貧の、市民權を奪はれた勞働者集團を形づくつてゐる。次ぎに擧ぐるは安いイタリア人勞働力を消費する最重要國である。フランス——一九一〇年に四〇〇、〇〇〇人（一八八一年には二四〇、〇〇〇人）、スウェーデン——一三五、〇〇〇人（一八八一年には四一、〇〇〇人）、オーストリア——一八〇、〇〇〇人（四〇、〇〇〇人）、ドイツ——一八〇、〇〇〇人（七、〇〇〇人）、合衆國——一、

七七九、〇〇〇人（一七〇、〇〇〇人、ブラジル——一、五〇〇、〇〇〇人（八二、〇〇〇人）、アルゼンチン——一、〇〇〇、〇〇〇人（二五四、〇〇〇人）。百一十五年前には自己の自由のために戦つたことのある『光榮ある』フランス、そしてその理由から植民地における自國およびイギリスの奴隸使用權のための現在の戦争を、『解放戦争』と名づけてゐる、そのフランスが、取りも直さず特殊部落に十萬人のイタリア勞働者を擁してゐて、『大』國民の小ブルジョアの蛆虫どもは、この部落からできるだけ分離しようといふと、この部落をあらゆる方法で賤め辱しめようといふてゐる。イタリア人は侮蔑的に『マカロニ』と名づけられてゐる。（大ロシア人の讀者は、同じくロシアにおいても、高貴なる特權を以て生れてくる幸運を有せずして、大ロシア人のみならずロシアのすべての他民族の壓迫の道具として、プリシケウヰツチ（『黒色百人組』代表者にしてユダヤ人虐殺の頭目）の御用に立つてゐる『外國人』に對して、如何に多くの侮蔑的綽名を附せられてゐるかを思ひ出すことができる。）大フランスは一八九六年にイタリアと協定を結びそれによつてイタリアはチュニスにおけるイタリア人學校の數を増加しないように義務づけられた！ 然るにチュニスにおけるイタリア人人口は爾來六倍に殖えてゐる。チュニスには三萬五千のフランス人の外に十萬五

千のイタリア人が住んでゐるが、後者のうち千五百五十七人の土地所有者が八萬三千ヘクタールの土地を有してゐるにすぎないのに、二千三百九十五人のフランス人がこの植民地において七十萬ヘクタールの土地を強奪してゐる。そこでイタリアはトリポリに植民地を所有したり、ダルマチアにおけるスラヴ人を壓迫したり、小アジアを分捕つたりする「權利」を有するといふ、ラブリオラその他イタリア『ブレハノフ主義者』の主張に、何故に同意してはいけないのだらう！*

*イタリアの帝國主義への推移と、政府側からの選舉改正の認容との相互關係は、極めて致訓的なものである。この改正は有権者数を一、二三九、〇〇〇人より八、五六二、〇〇〇人に増加した。即ち殆んど普通選舉を實施したのである。トリポリ戰爭以前には、その選舉改正を行つた外ならぬヤオリッチが、この改正の斷乎たる反對者だつた。ミケルスは記して曰く、『政府および穩健なる諸黨側からの方針變更の根據』は、もともと愛國主義的なものであつた。『植民地政策に對しては往昔より原則的に反對してきたにも拘らず、工業労働者、就中重工業労働者は、期待に反してトルコに對して異常に結束して喜んで戦つた。政府の政策に對する此くの如き奴隸的態度は報酬に値ひするものであつて、その報酬はプロレタリアートに獎勵して、同一の道をヨリ以上に進ませるに相違ない。内閣首相は議會で次ぎの

如く聲明した、イタリア労働階級はリビア戰場における愛國的態度によつて、彼れ等は爾今、政治的成熟の最高の段階に達したことを故國に向つて立証した。崇高なる目的のために生命を犠牲にする、とのできる人員は、選舉人としても故國の利益を擁護する能力があり、従つて國家をして、彼れ等が政治上完全なる權利を有するものと考へさせる權利を有する。』(第三七七頁。)イタリアの大匠はうまいことを言ふ！だが今日次ぎのような對間的議論を繰り返してゐるドイツの『急進』社會民主主義者の方が、もつとうまいことを言つてゐる、曰く、『吾々』は義務を遂行し、他國を掠奪するために『諸君』を扶けてきた、それなのに『諸君』は『吾々』に對して、プロシヤで普通選舉權を與へようと思はないのか？……

ロシアを自國の植民地たらしめんとするドイツの努力に對するロシアの『解放戰爭』を、ブレハノフが擁護してゐると同じく、改良主義者黨の領袖エル・ピソラーチも『外國資本のイタリア侵入』に對して宣戰してゐる(第九七頁)。即ちロンバルディアにおけるドイツ資本、シシリアにおけるイギリス資本、ピアツェンチノにおけるフランス資本、電車企業におけるベルギー資本、その他無限にそらいふ外國資本に對して戦ふわけだ。

問題は決定的に提出されてゐる。そしてヨーロッパ戦争は何百萬といふ人間に對して次ぎの如き問題を現實に決定的に提出したことによつて、人類に莫大な効用をもたらしたことを承認せざるを得ない。即ち劍または筆で、直接または間接に、何等かの形において一般に國民的利益や自國ブルジョアジーの特權や要求を擁護するか、即ち彼れ等の從屬者または幫間になるか、それとも國際的に團結せるプロレタリアートの×××を以て、あらゆる×××、就中×××××の正體を暴露し、これを倒壊するために、特權に對するあらゆる鬭争、殊に×××鬭争を利用するか。この場合中間の道は存在しない。別な言葉でいへば、中間的態度を取らうとする試みは、實際上では帝國主義ブルジョアジーの味方に移つたのを糊塗することを意味する。

バルボニのこの書物は、もともと、ブルジョアジーの味方に移つたのを隠蔽するだけのために存在してゐるのだ。バルボニはわがポトレソフ君と同じく、人は國際的立場から、何れの側の成功がプロレタリアートにとつて有利または有害であるかを確定しなければならぬと主張することによつて、インタナショナル主義者を装ひ、そしてこの問題に對しては、勿論……オーストリアおよびドイツに反對せよと答へてゐる。バルボニは全然カウツキーの精神において、イタリア社

會主義黨に對して、堂々と、萬國の、就中交戰國の労働者の連帶を宣するよう提言し、次いでインタナショナル主義的確信を有することを勧め、軍備撤廢とすべての國民の民族的獨立と、並びに『不干渉および獨立の相互的保證のための全民族聯盟』の設立とを基礎とする講和綱領をすゝめてゐる(第一二六頁)。そしてバルボニは外ならぬこの原則の名において、次ぎの如く説いてゐる。曰く、軍國主義は資本主義の『寄生的』現象であるが、決して必然事ではない。曰く、ドイツおよびオーストリアは『軍國的帝國主義』で貫かれてゐる、そしてこの兩國の侵襲的政策は、ヨーロッパの平和に對する不斷の脅威である。曰く、ドイツは『ロシア(原文のまゝ!!)』とイギリスの軍備縮小の提案を絶えず拒絶してきた』等々。そして曰く、イタリア社會黨はイタリアの三國協商加入に賛成しなければならぬ!

二十世紀において爾餘のヨーロッパ諸國よりも經濟上急速に發達し、また植民地分捕りに『危く』入り込んだドイツのブルジョア帝國主義の方を、如何なる原則によつて、イギリスのブルジョア帝國主義よりも撰ばなければならぬといふのか、依然として分らない。イギリスはずつと緩漫に發達して、そして無數の植民地をものにしたのだが、その植民地では(ヨーロッパから遠く離れ

たところで) ドイツと同様な野蠻な壓迫方法を用いてゐるし、また自己の數十億の金のために、大陸諸強國の幾百萬の軍隊を備つてオーストリア、トルコ等の掠奪に資してゐる。バルボニのインタナシヨナル主義とは、カウツキーのそれと同じく、要するに社會主義原則を唇だけで承認することであつて、他方この虚偽の上皮の下で、實際上はイタリアのブルジョアジーの擁護を主張することである。バルボニはその書を自由なスキスで發行しながら(スキスの検閲官はその書の第七五頁に、一見オーストリアの批評に費やされてゐる文句半行を抹殺しただけにすぎぬ)、一四三頁に涉るこの書の中にバーゼル宣言の原則を只の一度も説かず、それを正直に解剖することを試みなかつたことは、特に力説しなければならぬ。しかしその代りに今日親佛ブルジョアジー全體に擔がれてゐる二人のロシア前革命家、即ち無政府主義小ブルジョアのクラボトキンと、社會民主主義俗物のブレハノフとが、わがバルボニによつて深甚な同感を以て引用されてゐる(第一〇三頁)。當然のことだ! ブレハノフの詭辯は元來その本質上、バルボニの詭辯と少しも區別がない。たゞイタリアの政治的自由がその詭辯の假面を剝いで、労働者陣營内におけるブルジョアジー代理人たるバルボニの正體を暴露しただけである。

バルボニはドイツ社會民主黨における『眞正の革命的精神の缺如』を歎いてゐる(ブレハノフと同じく)。そしてカール・リープクネヒトを燃ゆるが如く慶賀してゐる(己れの眼の中の梁を見ないフランス排外社會主義者が、彼れを慶賀してゐると同じだ)。ところがバルボニは『インタナシヨナルの破産とは言ひ得ない』(第九二頁)だの、ドイツ人は、自分の祖國を擁護してゐるといふ正直な確信を以て行動した限りは、インタナシヨナルの精神を抛棄したとは言へぬだのと斷言してゐる。そしてカウツキーと同じ熱心な調子で、但しロマンチックな能辯で、バルボニは次ぎの如く説いてゐる、インタナシヨナルは(ドイツに勝つた後に)……『ドイツ人の不信の點を、キリストがベテロを赦したように赦し、軍國的帝國主義によつて傷付けられた深傷を忘却に委して、高貴なる友愛的な平和を結ぶためにドイツ人に手を差し出す』用意があると(第一一三頁)。

何といふ感動すべき光景だらう、バルボニとカウツキーとが——おそらくコソフスキーやアクセルロッドも参加しなくてはならぬ——互ひに救し合ふとは!

カウツキーやゲード、ブレハノフやクラボトキンに一から十まで満足してゐるバルボニは、イタリアにおける彼れの社會主義労働者黨には不満足なのである。この黨は仕合せにも既に戦前に

において、改良主義言のピツラーチ一味と手を切つたものであつて、『絶対中立』の標語に賛成せる
人士、即ちイタリア参戦の斷乎たる反對者だつた人士（バルボニの如き）が、この黨の中で生息で
きないような「景園氣」をつくり出してゐた。憐れなるバルボニは痛嘆して曰く、イタリアの社會
黨では彼れの如き人士は「インテリゲンチア」と呼ばれるか、または「大衆との接觸を失つた人
間、ブルジョアジーの片割れ」、乃至は「社會主義およびインタナシナル主義の正道から分離し
た人間」と呼ばれてゐると。そしてわが黨は「大衆を教育するよりも、むしろ空想に耽つてゐる」
と威猛高に叫んでゐる（第四頁）。

昔ながらの繰り言だ！これは知名のロシア解黨派と日和見主義者とが、『ナーション・サーリヤ』
や組織委員會やチヘイゼ分派の立派な社會主義に對して大衆を「嫉しかける」と言つて、凶惡な
るポリセヴィキの「煽動」に反對した、そのイタリア製の變り種にすぎない！しかしながらこ
れは、排外社會主義者の政綱と革命的インタナシナル主義者の政綱とを數箇月の間自由に論議
することを得た唯一の國において、取りも直さず労働大衆、取りも直さず階級意識あるプロレタ
リアートが後者の政綱に左袒し、小ブルジョア知識分子と日和見主義者とが前者の政綱に味方し

たといふことを承認した、イタリア排外社會主義者の貴重なる告白である。

中立とは偏狹なる利己主義であり、國際的形勢の見損ひであり、ベルギーに對して卑しむべき
態度を取ることであり、『放心』であつて、『放心者はいつても失策する』——と、全然ブレハノフや
アクセルロッドの精神でバルボニは理屈をつけてゐる。だがイタリアには改良主義黨と社會民主
主義労働者黨といふ二つの公然の黨が存立してゐるので、そつといふ國では、ポトレソフ、チェレワ
ニン、レヴィツキとその一味の諸君の裸體を、チヘイゼ派や組織委員會の無花果の葉で隠蔽する
ことによつて、公衆を迷はすことはできないのだから、バルボニも卒直に次ぎのことを認めてゐ
る——

『この見地からすれば予は、龜が甲羅のかけに身をかくすように、絶対中立のかけに身をかく
してゐる公式革命的社會主義者の戦術よりも、この政治的局面の更新が』（ドイツ軍國主義に對す
る勝利の結果）『將來の反資本主義闘争にとつて、如何に莫大な意義を有してくるかを即座に會得
して、徹底的に三國協商側に味方した改良主義社會主義者の行動の方に、ヨリ多く革命的精神を
認める』（第八一頁）。

戦争によつて惹起されたどえらい危機の時代には、國際的社會主義運動の發展は遅々として進行する。にも拘らずこの運動は、まさしく日和見主義および排外社會主義との絶縁の方向に進んでゐる。一九一五年九月五―八日チンマーワルト(スキス)における國際社會主義者會議は、このことを明瞭に示した。

この一年間といふものは、交戦國および中立國の社會主義の間に、動搖と左顧右盼の過程を認めることができた、――即ち人々はこの危機の深刻さを自認することを恐れ、現實を直視することを躊躇し、西ヨーロッパの官認諸黨の中にはびこつてゐる日和見主義者およびカウツキー主義者との不可避的絶縁を、千種萬様の方法で以て延ばしてきた。

しかも一年前に吾人が中央委員會の告示(『ゾチアル・デモグラット』第三三號)の中に與へて置いた、諸々の出來事に對する評價は、正しいものであることが立證された。出來事がこの評價の正しいことを證明した。即ち出來事は次ぎの如き方向を辿つた。即ち官認諸黨の決議に、反對の行動に出たところの、言ひかへれば、事實上異端者および背反者たる態度を取つたところの、少數反對派の分子(ドイツ、フランス、スウェーデン、ノルウェー)が、この最初の國際社會主義者會議に代表

されるようになった、そつういふ方向を辿つたのである。

會議の業績は一つの宣言と、逮捕され死刑に處せられた人々に對する一つの同情決議とより成る。會議は、吾々その他の革命的マルクス主義者によつて提出された決議案を委員會に附托することを、一九票對十二票を以て否決し、吾々の決議案は他の二つの決議案と一括して、一般的宣言の作成のために委員會附托となつた。

採用された宣言は事實上日和見主義および排外社會主義との、精神のおよび實際的絶縁への一歩前進を意味する。だが同時にまたこの宣言は、以下の分拆が示すように、不徹底と中途半端とに悩んでゐる。

宣言はこの戦争を帝國主義戦争と説き、この帝國主義戦争の概念の二つの特徴を擧げてゐる。即ち利瀾・搾取に對する各國資本家の努力、並びに世界分割と弱小民族奴隸化とに對する各強國の努力がそれである。戦争の帝國主義的性質を述べる場合には是非とも擧げなければならぬものであつて、且つ吾々の決議の中に擧げられてゐる事柄のうちの最も大事な點は、この宣言にもその通り擧げてある。この部分で言へば宣言は吾々の決議を單に通俗化してゐるにすぎぬ。通俗化

といふことは斷乎として必要な事柄である。しかしながら吾々が勞働階級思想を明瞭ならしむることに努めるなら、吾々が系統立つた斷乎たる宣傳に價值を置くなら、宣傳さるべき原則を正確且つ充分に確立しなければならぬ。そういふことをしなければ、即ち吾々はその崩壊の原因となつてきたところの、第二インタナショナルの罪を反復する過誤を犯すことになる。即ち吾々はあらゆる曖昧と誤つた解釋とに門戸を開くことになる。たとへば決議の中に表現されてゐるところの、社會主義における客觀的前提條件の成熟の思想が、重大な意義のあるものであることを誰れが拒み得よう？ 然るに宣言の「通俗的」説明の中にはこの思想が省かれてゐる。明瞭な原則的決議を、單一的な全體への訴へと融合しようとする企ては失敗してゐる。

『すべての國の資本家は……戦争が祖國擁護に役立つと主張する。……彼れ等は偽つてゐる……』。宣言はそう續けてゐる。このように、この戦争における日和見主義の根本思想、祖國擁護の觀念に、『虚言』といふ烙印を捺すことも、矢張り革命的マルクス主義者の決議中の本質的思想の繰返しである。そして矢張り茲にも或る小心翼翼たる中途半端、或る種の怯懦、全眞理を公言する不安が現はれてゐる。社會主義にとつての本統の不幸は、資本家の虚言が資本家新聞側か

ら反復され、支持されてゐるばかりでなく（資本家の虚言を反復するためにこそ資本家新聞があるのだ）、最大部分の社會主義新聞側からもそつされてゐることだといふことを、戦争一年後の今日、知らない者が一體あるだらうか？ ヨーロッパ社會主義の最大危機が『資本家の虚言』を惹きおこしたばかりでなく、ゲード、ハインドマン、ブレハノフ、ヴァンデルヴェルド、カウツキの虚言をも惹きおこしたことを、知らない者が一體あるだらうか？

ところが實際に行はれてゐることを見よ。通俗化のために一般大衆に向つてこう言はれてゐる、この戦争における祖國擁護の觀念は資本家の虚言だと。だがヨーロッパにおける大衆は決して文盲者ではなく、宣言の讀者の殆んど全部は、數百の社會主義新聞、雜誌、パンフレットから右の虚言を聞いたし、また現に聞いてゐる。これらの新聞雜誌はブレハノフ、ハインドマン、カウツキの一味に従つてこの虚言を反復してゐるのだ。宣言の讀者は何と考へるだらうか？ 宣言起草者の怯懦がこんなに明白に表明されてゐるのを見て、讀者の頭にはどんな考へが浮ぶだらうか？ 祖國擁護といふ資本家の虚言に耳を傾けるな——と言宣は勞働者に教へてゐる。立派な言葉だ。だが殆んどすべての勞働者は次ぎの如く答へるか、自分で考へるかするだらう——資本家の虚言

は最早や吾々を迷はせはしない、がカウツキー一味の虚言に至つては……と。

更らに宣言はもう一つ、吾々の決議の本質的思想をそっくり繰返してゐる。曰く、各國の社會主義黨と労働者團體とは、シュツトガルト、コペンハーゲン、バーゼルの大會の決議から生ずる義務を蹂躙し、同じくまた國際社會主義事務局(インタナシヨナル本部)は自己の義務を怠つた、そしてこの義務の××××××××××××××××致に對する同意となつて現はれたと。(宣言はこれを奴隸的と呼んでゐる。即ちゲード、ブレハノフ、カウツキーが社會主義の宣傳に代ふるに奴隸的觀念の宣傳を以てしたことを非難してゐる。)

通俗的な宣言の中に、幾多の黨の義務の懈怠を述べてゐながら——周知の如くこれはイギリス、フランス、ドイツの如きすべての最進國の労働者團體の最も有力な黨がその眼目となるのだ——それなのにこの驚くべき、前代未聞の、未曾有の事實に何等説明を與へずにおくといふことは、果して徹底したやり方だらうか？ 大多数の社會主義黨と國際社會主義事務局そのものが義務を怠る！ これは一體如何なることだらうか？ 偶然事であり個々の人士の拒絶だらうか？ それとも一つの時期々體の變革だらうか？ 前者の場合が本統であり、そして吾々がそつといふ思想を

大衆の間に與へるとすれば、吾々が社會主義教説の原則を抛棄したことを意味する。後者の場合が本統だとすれば、——何故にそのことを直接に述べないのか？ インタナシヨナルの崩壊といふ歴史的な世界的危機、一つの時機全體の變革でありながら、しかも大衆に向つて次ぎの如く言ふことを怖れてゐるのだ、全眞理を追求し、發見し、自己の思想を終局まで押し進めて考へることが必要な、國際社會主義事務局と幾多の黨の崩壊といふ現象を、深い經濟的根柢を有するヨーロッパ日和見主義潮流の發生、成長、成熟、爛熟の永い歴史と關聯させずに、たゞ漠然と揣摩憶測することは不條理であり、笑ふべきことだと——こゝに深い經濟的根柢と言ふのは、離すことができないまでに大衆と結びついてゐるといふ意味でなく、或る一定の社會層と連絡があるといふ意味である。

宣言は『平和のための闘争』の件に移つて、『この闘争は自由と諸民族の友愛とのための闘争、社會主義のための闘争である』と説き、進んで、労働者は戦争では『支配階級の役に立つように』犠牲にされなければならぬが、『自分自身の事柄のため』(この言葉は宣言には二度も力説されてゐる)『社會主義の神聖なる目標のため』犠牲を拂はねばならぬ、と説いてゐる。そして逮捕され死

潮流と革命的國際的マルクス主義の潮流との和睦は、客觀的に可能だらうか？吾々はそうでないと思ふ、そして吾々は十月五—八日の會議における吾々の方針の成功に鼓舞されて、この方針を更らに經續してゆくだらう。

＊だが組織委員會と社會革命黨とが、『ナリシヤ・サーリヤ』紙や、ルバノウツナヤ、ロシアの七月會議（一九一五年）との結託——並びに彼れ等の全過去——を維持しながら、外交家としての宣言に署名したからといつて、吾々は怖れるものではない。吾々はこの下劣な外交と戦ひ、それを暴露する可能性を充分にもつてゐる。この外交が自分で段々化けの皮を現はしてくる。『ナリシヤ・サーリヤ』ミナヘイゼ派とが吾々を扶けてアクセルロッド一味の正體を暴露してくれる。

けだし吾々の方針の成功は疑ふべからざるものである。事實を比較して見よ、一九一四年九月には、わが中央委員會の宣言は謂はゞ獨りほつちであつた。一九一五年一月には、國際婦人會議が催されて貧弱な平和主義的決議を可決し、組織委員會がそれに盲從した。一九一五年九月には、吾々は國際的左翼の一團を結成して、独自の戰術を以て臨み、共同宣言の中に幾多の吾々の根本觀念を持ち込み、舊國際社會主義事務局の意志に反對して、舊事務局の戰術を直截に貶謫してゐ

る一つの宣言を基礎とする、國際社會主義委員會、即ち事實上新たな國際社會主義事務局の創立に參與してゐるのだ。

すでに一九二—一四年はわが社會民主黨中の大多數派とその中央委員會とに従つたロシアの労働者は、吾々の戰術が一層廣汎な土臺の上に確證されてゐること、プロレタリア・インタナショナル中の絶えず増大しつゝある最良の部分が吾々と根本思想を共にしてゐることを、今や國際的社會主義運動の經驗から認めるであらう。

一九一五年九月五—八日國際社會主義
會議における革命的マルクス主義者

一九一五年十月十一日。『ソチアル・デモクラット』第四五—四六號所載。

る仕事は今のところは——正しい戦術を

することである。そつすれば出来事が、運動

の速度と共通方向の改修（民族的、地方的、組合的）を示してくれるだらう。フランスのプロレタリアが無政府主義的文句によつて毒されてゐるとすれば、ミルラン主義によつても毒されてゐる。そして宣言の中でこれらのことを緘黙することによつて、この害毒を増すことは吾々のすべきことではない。

外ならぬメレイムその人が、或る獨特な、極めて當を得た言句を洩らした。曰く、『黨（社會黨）、ジュオー（労働總同盟主事）、政府——これは一つの帽子をかぶつた三つの頭だ』と。これは本統である。これは、フランスのインタナショナル主義者と黨とジュオー君との、開戦以來一年間の經驗によつて確證されてゐる事實である。だがこゝから脱する道はたゞ一つ、即ち日和見主義者の黨とアナルコ・サンデカリズムの領袖とを克服せずしては、政府と戦ふことはできぬ、といふことである。然るにこゝにいふ闘争の任務は、吾々の決議とは違つて、共同宣言の中には、ホンの暗示が與へられてゐるだけで明言されてはゐない。

吾々の戦術に反對した一人のイタリア人は、こゝ言つた——諸君の戦術は遅すぎるか（戦争がす

でに始まつてゐるのだから）、それとも早すぎるか（戦争は××

をまだつくり出して

ゐないのだから）である。その上に諸君は、吾々の宣傳が「強力に反對する」ことを説いてゐたといふ理由で、インタナショナルの『綱領の變變』をすら薦めてゐると。それに對しては吾々は、ジュール・ゲードの「En garde」からの引用文で以て容易に答へることができよう。曰く、第二インタナショナルの知名の指導者のうち、何人と雖も××と一般に直接××闘争方法を否認したものはない。合法的闘争、議會主義××××結合さるべきであつて、この兩者は運動の事情の變化に應じて、不可避的に一方のものから他方のものへ移らなければならぬと、すべての人がつねに主張してゐた。ついでに、吾々はこの同じ書物「En garde」から、一八九九年に語つたゲードの言葉を引用したい。即ちゲードは、販路、植民地等のために戦争が起る見込みを記し、そゝいふ戦争にフランス、ドイツ、イギリスのミルランが現はれるとすれば、プロレタリアートの國際的連帯は悲しむべき状態にあるだらうといふことを示唆してゐる。ゲードはこの言説を以て、當初から、われとわが身に死刑の宣告を下してゐるのである。しかし吾々の××の宣傳が『時宜を得ない』といふ非難について言へば、この非難はラテン系社會主義者の間に普通

となつてゐる概念の混亂に基くものであつて、彼れ等は××の開始を、公然且つ直截の××宣傳と取り違へてゐる。ロシアでは何人と雖も一九〇五年革命の發端の日附を、一九〇五年一月九日より早くは算へない。だが本來の意味での××××宣傳、大衆行動や示威運動やストライキや××への準備は、前以て何年間も行はれてゐたのである。たとへば舊『イストラ』は一九〇〇年以來この宣傳を行つてゐた。恰かもマルクスが、ヨーロッパにおける革命の開始が少しも問題になり得なかつた時代の一八四七年以來、この宣傳を行つてゐたと同様に。

革命がすでに始まつた時は、自由主義者やその他革命反對者からも『認知』される。就中その革命を裏切り、拋棄するために認知される。然るに××××はその××××を、開始以前に豫見し、その××××を認め、その必然を大衆の間に知らせ、その道行と方法を大衆に明らかにする。

カウツキトとその朋友は、グリムの手から會議召集權を取りあげ、左翼の會議を無効にしようとして腐心した（剩へカウツキの親友どもは、この目的のために旅行を企てた、これは會議の席上で暴露された事實である）——歴史の皮肉は、取りも直さずこのカウツキ一味をして、會議を左の方に驅り立てる役を演じさせたのである。日和見主義者とカウツキ主義者とは、吾々の黨が

占めてゐる陣地の正しいことを、彼れ等自身の實行によつて確證したのである。

若干の論策

一九一五年十月十三日。(『ソチアル・デモクラット』第四七號所載。)

『ゾチアル・デモクラット』本號に載せた資料は、吾々の黨が如何に偉大な働きを發揮してきたかを示すものである。ロシアおよびインタナショナル全體にとつて、これは最も困難な諸關係の下における反動戰爭中の社會民主主義的仕事の、一つの眞の手段である。ペテルスブルグおよびロシアの労働者は、全力を擧げてこの仕事を支持し、且つ一層精力的に、一層有力に、この仕事を引續き同一の道の上にすゝめて行くだらう。

吾々は茲にロシアの同志の要求を考量して、社會民主主義的仕事の現實的諸問題に關する若干の論策を要約する。一、『憲法議會』の標語は獨立の標語としては不當である。けだし現在においては、 $\times\times$ がこれを召集するかといふ點に問題全體が存するからである。自由主義者は、この標語を一九〇五年に受け容れた。けだしこの標語は、ツァールから召集され、ツァールと契約するところの憲法議會の意味に解釋され得たからである。最も正しいのは次ぎの三つの合言葉である——民主主義 $\times\times\times$ 、 $\times\times\times\times\times\times\times\times\times$ 、八時間労働、これに社會主義のため、交戦政府の $\times\times\times\times$ のため、そして戦争反對のための闘争における、労働者の國際的連帯に對する訴へを附け加へたものである。二、吾々は帝國主義反動戰爭を促す戦時工業委員會への

する。吾々は

選舉戰の利用に賛成する、煽動上および組織上の目的のために、たとへば選舉の第一段階への参加に賛成する、——國會のボイコットは問題となり得ない。國會改選への参加は無條件に必要である。國會は吾々の黨の代議士が一人も議席を占めてゐない限りは、國會の中で行はれるすべての事柄を、 $\times\times\times$ 社會民主主義の立場から、なければならぬ。三、吾人はプロレタリアートの間に社會民主主義的仕事を固め、ひろげること、次いで農村プロレタリアート、貧農、 $\times\times$ にこれを擴張することを、焦眉の、且つ、と考へる。 $\times\times\times$ 社會民主主義の最も重要な任務は、萌芽しつつあるストライキ運動を、これを右の三つの根本要求の合言葉の下に導くことである。煽動においては、戦争の $\times\times\times\times\times\times\times\times\times$ 適當に取り容れなければならぬ。他の要求と並べて、労働者は労働者代議士、ロシア社會民主労働者派の所屬員を追放より召還すべしといふ要求をも忘るべきではない。四、労働者代議員評議會(ソヂエット)および類似の機關は、 $\times\times$ の機關、 $\times\times\times\times\times\times$ の機關と見做さなければならぬ。これらの機關は政治的大衆ストライキの展開と聯絡してのみ、 $\times\times\times$ 聯絡してのみ、その準備、發展および進歩の度合に應じてのみ、確實な効用をもたらし得るものである。五、ロシアにおける當面の $\times\times$ の社會的内容は、純

ならず、經濟的、財政的(戦争の負擔)、軍事的、政治的、その他の種類の幾々の客觀的要因によつても、左の方に驅り立てられるのである。——**一**、 $\times \times$ がプロレタリアートの黨を現在の戦争中に $\times \times \times \times \times \times$ 即かせたとしたら、黨は如何なることを行ふかといふ問題に對しては、吾々は次ぎの如く答へる、吾々はすべての交戦國に對して、植民地およびすべての隸屬的な、壓迫され、權利を剝奪された民族の $\times \times \times$ 、 $\times \times \times \times \times \times$ 提議するだらう。ドイツにしろ、イギリスやフランスにしろ、現在の政府の下にあつてはこの條件を受け容れまい。その時は吾々は $\times \times \times \times \times \times$ を準備し且つ行ふだらう、即ち吾々は斷乎たる手段を以てわが最低綱領を實施するばかりでなく、現在大ロシア民族によつて壓迫されてゐるすべての民族、すべての植民地、アジアの隸屬國(インド、支那、ベルシャ等)を $\times \times \times$ させ、就中ヨーロッパの社會主義プロレタリアートを鼓舞して、彼れ等の排外社會主義者に對しては、彼れ等の $\times \times$ に對しては $\times \times$ を立てるだらう。ロシアにおけるプロレタリアートの勝利は、アジアにおいてもヨーロッパにおいても、 $\times \times$ のため異常に $\times \times$ な條件を生ずることは、疑ひを容れぬ。これは剩へ一九〇五年が立證したところである。 $\times \times \times$ プロレタリアートの

は、日和見主義および排外社會主義のゴ

ミユミした層の存在にも拘らず、一つの事實である。

革命の二つの方針について

一九一五年十一月二十日。『ソチアル・デモクラット』第四八號所載。

『プリシフ』第三號にブレハノフ氏は、ロシアにおける來るべき革命に關する理論的根本問題を提起しようと試みてゐる。そのために氏は、フランスにおける一七八九年の革命は上昇的線に沿ふて動いたが、一八四八年のそれは下降的線に沿ふて動いたといふ意味の、マルクスの文章を用してゐる。第一の場合には権力が漸次に最も隠和な黨から、段々急進的な黨へ移つて行つた。——憲法派——デロンド派——ジャコバン派といふ風に。第二の場合にはその反對を見る、即ち、プロレタリアート——小ブルジョア民主主義者——ブルジョア共和派——ナポレオン三世。そしてわが著者は結んで曰く、『ロシア革命を上昇的線に導くことは望ましい、』即ち権力が最初にカデット(立憲民主黨)とオクトブリスト(十月黨)とに移り、次にトルードウィキ(労働黨)——小ブルジョア農民の利益代表者)に、その次ぎに社會主義者に移ることが望ましいと。この考察からは、カデットを支持することを欲せずして、カデットに對して早まつて不信の意を表明してゐるロシアの左翼は不聰明だ、といふ結論が當然引き出される。

このブレハノフ氏の『理論的』考察は、矢張りまた、マルクス主義と自由主義との混同の一つの見本を示すものである。ブレハノフ氏は事柄を、進歩せる分子の『兵略的概念』が『正當』だ

つたか不當だつたかといふ問題に還元してゐる。マルクスはそれと違つた立論をした。彼れは、革命が右の二つの場合に違つた経過を取つたといふ事實は指摘したが、この相違の説明を『兵略的概念』には求めなかつた。マルクス主義の立場から見れば、この相違を概念に求めようと欲するのは笑ふべきである。それは階級の交互關係の相違に求めなければならぬ。同じくマルクスは一七八九年にはフランスにおけるブルジョアジーは農民と結合し、一八四八年には小ブルジョア民主主義がプロレタリアートを代表してゐたと書いた。ブレハノフ氏はこのマルクスの見解を心得てゐる。然るに氏はマルクスをスツルーフ流に捲き縮らせるために、このことを緘黙してゐるのだ。フランスでは一八七九年には専制主義と封建貴族との倒壊が眼目だつた。當時の經濟および政治的發達の段階においては、ブルジョアジーは(諸階級の)利益の調和を信じてゐた。ブルジョアジーは自己の支配の確實さについて少しも心配するところなく、安んじて農民との聯盟に身を委ねた。そしてこの聯盟は革命の絶對的勝利を保證したのである。然るに一八四八年はプロレタリアートによるブルジョアジーの倒壊が眼目だつた。プロレタリアートは小ブルジョアを味方につけることに成功せず、小ブルジョアの裏切りの結果が革命の敗北となつたのである。一七八九年の上

シア・プロレタリアートの勢力も、自由主義者の此くの如き態度を不可避的ならしめたのである。

ポリセヴィキは第一の方向に従ひ、献身的勇氣を以て戦ひ、農民を前進させるために、意識的にプロレタリアートを扶けた。メンセヴィキは絶えず第二の方向に轉落した、そしてブリギン國會に参加せよ（一九〇四年八月）といふ要求を掲げたのを手初めとして、一九〇六年にカデット内閣を支持したり、一九〇七年に民主主義に反對してカデットと聯盟したりして、労働者運動を自由主義者に順應させることによつてプロレタリアートを腐敗させた。因みに、ブレハノフ氏の見地からすれば、當時カデットおよびメンセヴィキの『正常なる兵略的概念』が敗北した。何故か？ 何故に大衆は賢明なるブレハノフ氏の言に聽かず、ポリセヴィキの忠告よりも百倍も弘布されてゐたカデットの忠告に聽かなかつたらうか？

この二つの潮流、即ちポリセヴィキの潮流とメンセヴィキの潮流だけが、一九〇四—〇八年にも、その後の一九〇八—一四年にも、大衆の政治となつて現はれてきた。何のためか？ この二つの潮流のみが大衆の中に鞏固な根底を有してゐたためである。即ち前者はプロレタリアートの中に、後者は自由主義市民の中にこれを有してゐたのである。

今や吾々は再び革命に當面してゐる。これは萬人の認めるところである。かのフウカストフの如き人間すら、農民は一九〇五—〇六年を想起させる氣もちになつてゐると語つてゐる。そして今度も矢張り以前と同一の、革命の二方向と、以前と同一の、二階級の交互關係とが存在してゐるのであつて、ただ國際的形勢の變化のために變化してゐるだけである。一九〇五年にはヨーロッパのブルジョアジー總體がツァーリズムを支持し、或ひは數億金を以て（フランス）、或ひは反革命軍隊の武装を以て（ドイツ）これを扶けた。一九一四年にはヨーロッパ戦争の口火が切られ、いたるところにブルジョアジーが暫時の間プロレタリアートを征服して、國民主義と排外主義との×××、××××××××××溺らせた。ロシアでは小ブルジョアの民衆、主として農民が従來通り人口の多數を占めてゐる。彼れ等は何よりもまづ××××××××××壓迫されてゐる。彼れ等は政治的には一部はまだ眠つてゐて、一部は排外主義（『ドイツに對する勝利』『祖國擁護』）と

動搖してゐる。この大衆とこの動搖との政治的代辯者は、一方にナロードニキ（トルドウィキと社會革命黨）であり、他方に社會民主黨員中の日和見主義者（『ナ！シユ・ディエーロ』、ブレハノフ、チヘイゼ派、組織委員會）であつて、後者は一九一〇年以來自由主義労働者政治の邪道に

トがすでに『ブルジョアの國民』に對向してゐるとすれば、ロシアは直接に社會主義XXに當面してゐるのだ！ そうだとすれば『大土地』のXXといふ標語（トロッキーは一九一二年の一月會議でも、一九一五年にもまだこれを繰返してゐる）は不當であり、また『XXX政府』を語るべきでなく、『社會主義労働者XX』を語るべきである！ トロッキーの混亂が如何なる限界に及んでゐるかは、次の一句から認めることができる。曰く、プロレタリアートは斷乎たる決心を以て『非プロレタリア的（！）民衆』をも捉致するだらう！ トロッキーは、プロレタリアートがXXXXXXXXXXのため非プロレタリア農村大衆を捉致して、XX、取りも直さずこれこそロシアにおける『國民的、ブルジョアXX』の完成を意味し、取りも直さずこれこそプロレタリアートと農民とのXXXXXXXXXXを意味するものだ、といふことは考へなかつた。

一九〇五—一五年といふ、まる十箇年——偉大なる十箇年——は、ロシア革命の二つの、そして只二つだけの階級的方向の存在を示してきた。農民が諸層に分化したことは農民内部の階級闘争を強め、政治的に眠つてゐる夥しい分子を目覚めさせ、農村プロレタリアを都市プロレタリア

に接近させてきた（ボリセヴィキは一九〇六年以來農村プロレタリアの特別の組織を主張し、この要求をストックホルムのメンセヴィキ大會の決議の中に入れさせた。）

然るに農民と支配的徒黨との對抗は有力となり、尖鋭となり、増大してゐる。これは明白な眞理であつて、トロッキーがパリで書いてゐる幾ダースの論說中の幾千の文句と雖も、この眞理を否定しないだらう。現にトロッキーは、農民の役割の『否定』を、農民を覺醒させることを好ましいことと解してゐるところの、ロシアの自由主義労働者政治家に反對してゐる！

そして今やこれが目抜きの特なのである。プロレタリアートはXXXXXXXXXXのために、XXのために、XXXXXXXXXXのために、言ひかへれば、農民を引き入れるために、農民のXX勢力を剩すところなく發揮させるために、ブルジョアのロシアを軍國的、封建的、『帝國主義』（ツァーリズム）から解放する仕事に『非プロレタリア的民衆』を參加させるために、戦つてゐるし、これからも不斷に戦ふだらう。そしてプロレタリアートは、このブルジョアのロシアをツァーリズムから、地主の農村支配から解放する仕事を、農村労働者との闘争における富農を扶けるために利用するのでなく——ヨーロッパのプロレタリアートと團結してXXXXXXXXXXするのために、即時利用

するだらう。

ど
ん
底
に
て

一九一五年十一月二十日。(『ソチアル・デモクラット』第四八號所載。)

個々の人士が急進的社會民主主義者や革命的マルクス主義者から排外社會主義者に衣更へしてゐるのは、あらゆる交戦國に特有の現象である、排外主義の潮流は猛烈であり、嵐のようであり、有力であつて、いたるところで幾多の無性格の社會民主主義者や、時代に取り残された人士がこれに攫はれてゐる。パルヴスはすでに一九〇五年のロシア革命の際に野心家たる正體を暴露したが、今や彼れの發行してゐる小雜誌『グロツケ』において、……どん底まで沈んでしまつた。彼れはトテモお話にならぬ厚かましい獨りよがりの顔付きで、ドイツの日和見主義者を擁護してゐる。彼れは以前に崇拜してゐたものを、すべて焚刑に處した。彼れは革命派と日和見主義派との闘争と、國際的社會民主主義におけるこの兩派の歴史とを『忘却』した。ブルジョアジーのお褒め言葉を確認してゐる赤本作者の如才なさを以て、彼れはマルクスの肩をたゞき、良心的な用意周到な批評の痕跡もなしにマルクスを『修正』してゐる。ところがエンゲルスとかいふ人間のことは、初めから輕蔑を以て扱つてゐる。彼れはイギリスの平和主義者と國際主義者、ドイツの國民主義者と萬歲愛國主義者とを庇護してゐる。そしてイギリスの愛國社會主義者を、排外主義者、ブルジョアジーの太鼓持ちと罵りながら、ドイツの愛國社會主義者には革命的社會民主主義者といふ尊稱

を奉つて、レンシユやヘーニツシユやグルンワルトと接吻を取り交してゐる。彼れはヒンデンブルグの長靴を舐めて、讀者に對して、ドイツ參謀本部はロシアに革命を起すために戦つてゐると保證して聞かせ、このドイツ『民族魂』の體現とその『力強い革命的感覺』のために下等な讚美歌を書き立てゝゐる。彼れはドイツが保守派と社會主義者の一部との同盟と、食糧切符とによつて、苦痛なしに社會主義に移ることを約束してゐる。下等な卑怯者たる彼れはチンマーワルト會議に双手をあげて同意し、チンマーワルト宣言の中に、パルヴスやブレハノフからコルプやカウツキにいたる排外社會主義のあらゆる流發に反對せる章句があるのを見落したかのように振舞つてゐる。

彼れの小雜誌第六號には何一つの正直な思想も、何一つの眞面目な議論も、何一つの堂々たる論説もない。そしてあるものは、馬鹿々々しい粗野な色彩のある立看板——ロシア革命の外見的利益の名におして(●)とふ——のかげにかくされてゐる、ドイツ排外主義の連綿たる排泄口である。この排泄口が日和見主義者から、コルプや『ヘムニツァー・フォルクススチンメ』紙から賞讃されてゐるのは言ふまでもない。

バルヴス氏は武装せるドイツのプロレタリアートと、ロシアの革命的プロレタリアートとの間の精神的結帯となるといふ、彼れの『使命』を公言するを憚らぬ。こゝにいふ滑稽な文句はロシア労働者の嘲笑に委ねておくだけで澤山だ。プレハノフ、ブナコフ諸氏およびその一味の『プリシフ』紙が、徹頭徹尾ロシアにおける排外主義者およびファウストフを承認する功蹟を擧げてきたとすれば、バルヴス氏の『グロッケ』はドイツにおける背教者の汚はしいおべつかの機關紙である。この機會に、もう一つ、現在の戦争の利益的方面を擧げざるを得ない。即ちこの戦争はその『速射砲』によつて、日和見主義と無政府主義とを殺したばかりでなく、野心家と社會主義の生んだ鶴との化けの皮を見事に剝いでゐる。歴史がこのプロレタリア運動の大掃除を、社會主義××の經過中に始めずに、そのホンの間際になつて始めたことは、プロレタリアートにとつて極めて都合なことである。

國際主義的言辭を以てする排外社會主義政策の粉飾

一九一五年十二月二十一日。(『ソチアル・デモクラット』第四九號所載。)

政治的事實と政治的文獻とは如何なる關係にあるか？ 政治的事件と政治的合言葉との關係、政治的實在と政治的イデオロギーとの關係如何。これらの問題は目下インタナショナルにおける全危機を理解する上に、最も根本的意義を有するものである。けだし如何なる危機も、いな進化における如何なる變革も、不可避的に舊形態と新内容との乖離を誘致するものだからである。ブルジョア社會は、階級外に立つてゐると稱する政治家をつねに抱えてをり、好んで社會主義者と自稱し、故意に且つ組織的に、極めて景氣のよい急進的に聞える言葉で以て大衆を迷はすところの、日和見主義者を抱えてゐることは、茲に言ふまでもない。だが危機の時代には、吾々は正直な人士の間にすらも絶えず言行の不一致を認める。そしてすべての危機——どんなに重大な、どんなに困難な、どんなに苦痛に充ちた危機であつても——の大きな進歩的意義は、取りわけ次ぎの點に存する。即ち危機は、たとへ正直なものであつても腐朽した言葉や、たとへ極上の計劃に基いてゐるものではあつても腐朽した制度物の正體を、驚くべき速度と力と明瞭さとを暴露してこれを飾ひのけてしまふといふ點である。

ロシア社會民主黨の存在における目下の最大の出來事は、戦時工業委員會へのペテルスブルグ

労働者の選挙である。戦争中初めてこの選挙が、プロレタリアの大衆を、事實上今日の政治の根本問題に関する討議と表決とに引き入れ、且つ大衆黨としての社會民主黨に現存してゐるもの、眞の圖面を吾々に示してくれた。今や二つの流派だけが現存してゐることが判明してゐる。そのうちの一つの流派、即ち×××國際主義的な、眞にプロレタリア的な、吾々の黨によつて組織された流派は、××××に反對して戦つてゐる。もう一つの、即ち排外社會主義的流派、『ナシシ・ディエーロ』信奉者(即ち解黨派の根本思想の信奉者)と、ブレハノフ主義者と、ナロードニキと、無所属者との聯盟を形づくつてゐる。そしてこの聯盟は當時ロシアの全ブルジョア新聞と、すべての反動派とから支持されてゐたのであつて、これによつてこの聯盟の政策が、プロレタリア的のものでなくブルジョア的のものであることが示された。

これが事實である。これが實相である。それなら合言葉とイデオロギーとは如何。これに對しては、ペテルスブルグの『ラボーチュエ・ウトロ』第二號と、組織委員會同人の合集(『インタナショナルと戦争』一九一五年十一月三十日、第一號)と、『ナシシ・スラヴァ』最近號とが答へてくれる。そしてこの問題に對する答へは、幾分でも政治に關心を有する人は、何人と雖も思慮しなけ

ればならなかつたものである。

このイデオロギーの内容および意義を考察しよう。

ペテルスブルグの『ラボーチエ・ウトロ』は、この場合最も重要な文書である。そこでは解黨主義と排外社會主義との頭目が、密告者のグウ・ステフ氏と席をつらねてゐる。これらの人士は、十一月二十七日の選挙以前の経過と、選挙中の出来事とはすべて熟知されてゐる。これらの現に隠蔽してゐて、この聯盟の意義、この聯盟の各種要素の数の上、相互關係については一言も洩らさなかつた。こゝにいふ『些細なこと』を秘密にすることは、彼れ等にとつて有利である、そして現に彼れ等はそれを秘密にしたのである（これに關する資料を、グウ・ステフ氏の仲間たる『ラボーチエ・ウトロ』同人は、確かに手中に握つてゐた）。だが九〇群と八一群以外の第三の群を彼れ等は突出することができなかつた。『コペンハーゲンから』の匿名者がドイツ新聞や『ナシエ・スラヴァ』の片隅で無駄話を弄してゐる『第三群』のことを、ペテルスブルグの此處彼處で労働者の面前で偽つて、恰かも存在するかの如く説くことは、不可能の事である。けだし苟くも常識

のある人間なら、直ちに嘘がバレるのを知つてゐる場合には、嘘を言はないものだからである。そのために『ラボーチエ・ウトロ』紙は、カー・オランスキー（實に久しぶりだ！）の論説『二つの立場』を發表してゐる。彼れは九〇群と八一群との兩陣を極く詳細に論じて、第三群のことは一言も述べてゐない。因みに、検閲官は『ラボーチエ・ウトロ』第二號を殆んど完全に棄なしにしてしまつた。即ち抹殺された箇所の方が残された箇所よりも多い位だが、論説の中で二つだけがそつくり残つてゐる。その一つは『二つの立場』、一つは一九〇五年の歴史を自由主義風に改悪して、『無政府主義』と『ボイコット主義』との故を以てポリセヴィキを罵つてゐる雑文である。ツァール政府にとつては、この種の事が書かれて發表されることは一つの利益である。だからこの種の言説は、専制主義ロシアでも共和主義フランスでも、いたるところで合法の獨占權を享有してゐることに不思議はない！

どんな論據を以て『ラボ・ウトロ』は『國土擁護』と『排外社會主義』といふ彼れの立場を擁護してゐるか？ たゞたゞ逃げ口上と、専ら國際主義的文句とを以て!! 曰く、吾々の立場は、思ふに決して『國民主義的』ではなく、また決して『國民擁護』に賛同するものではない、吾々は

單に『第一の立場では抑壓されてゐるところの、國の位置に對する不偏不黨の態度』、『國を瓦解と没落とから救ふ』態度を表明してゐるにすぎぬ。吾々の立場こそは『眞に國際的』であつて、國の『解放』のための手段および道を示した。吾々は戦争の起源とその社會的政治的本質とを、(第一の立場と)全然同様に(!!)評價した。吾々はプロレタリアートの國際的仕事(誰れだ、そこで笑ふのは?)、並びに『例外なしに國際的抗争の發展のすべての時期における、戦争中における民主主義』といふ一般的問題を、(第一の立場と)同様に(!!)略記した。しかも吾々は宣言の中に、『現在の社會的および政治的局面においては、労働階級は國土擁護に對して何等責任を負ひ得ない』と説いた。吾々は『何よりも無條件的に民主主義の國際的任務に賛同した。』『吾々はコペンハーゲンおよびチンマーワルトに段階をもつた諸々の努力の活ける流れに、内的論理を賦與した』(これも吾々と同様に!)。吾々は『無併合の平和』(傍點は『ラボ・ウトロ』)といふ標語に賛成してゐる。吾々は『第一の流派の抽象と世界主義的無政府主義とに對して、吾々の立場、吾々の戰術の、現實主義と國際主義とを對立させた。』

如何にもこれは珠玉の言ではないか? だがこの珠玉の中には、露骨な焼直しと間抜けた自負

との外に、極く思慮深い、且つブルジョアジーの立場から見て、正當な外交がひそんでゐる。労働者の上に働きかけ得るためには、ブルジョアは社會主義者、社會民主主義者、インタナショナル主義者等に化けなければならぬ、でなければ影響を及ぼすことはできぬ。そして『ラボ・ウトロ』は假裝し、粉粧し、彩り、磨きあげ、秋波を送つて、どんなものゝ前にも尻込みしない! 吾々はチンマーワルト宣言に百遍でも署名するし(この宣言の小心翼翼たる調子に反對せずに、何等留保なしにこれに署名するチンマーワルト派にとつて、何と氣もちのよい耳打ちではないか!)、戦争の帝國主義的性質に關するどんな決議にも、いつでも批准するし、わが『國際主義』と『革命主義』とに對してどんな誓約でもする、只々……戰時工業委員會に参加するように、即ち×××、反動的防衛戦争に事實上参加するように、吾々が労働者に訴へるのを妨げられさへしなければ。これだけが實質的なものであつて、他のすべては言葉である。これだけが意味を含んでゐるのであつて、他のすべては空文句である。これだけを警察、ツァール王制、フウ・ストフおよびブルジョアジーが必要とする。利口な國の利口なブルジョアジーは、たゞ國土擁護に參與さへしてゐれば國際主義的および社會主義的言辭に對しては寛大である。フランスの反動派新聞が、三國協商側

社會主義者のロンドン會議参加を評價したのを想起せよ。この新聞の一つはこう記した、社會主義者諸君は一種の癖をもつてゐる——同一の身振り、同一の筋肉運動、同一の言葉を不隨意的に繰返へす一種の神經病にかゝつてゐると。同様に『吾々』の社會主義者も、吾々は國際主義者だ、吾々は社會革命に賛成するといふ合言葉を繰返へさすには、何事も話せないのだ。しかしそんなことは、ちつとも危険ではない！ それは單に『癖』にすぎぬ。『吾々』にとつては、彼れ等が祖國擁護に賛同するといふ點だけが大事なのだ！

利口な英佛ブルジョアジ―は此の如く立論した——曰く、
への参加が、民主主義、社會主義等に關する問題で辯護されるのは、 $\times \times \times \times$ にとつて、

有利ではないか？ 吾々の主人は民衆に對する心づかひと、民衆に對する愛とに生命を捧げてゐるといふことを、全世界に向つて聲高く、嚴かに誓約する家僕を持つことは、主人にとつて有益なことではないか？

『ラボ・ウトロ』はチンマーワルトに忠誠を誓約し、ブレハノフ主義者のことなんか問題にしたがらず(言葉の上では)、幾多の點で彼れ等と違つてゐると聲明してゐるが、實のところは彼れ等

と原則的問題で一致してゐる。實際上は彼れ等と手に手を取つて、全ブルジョアジ―と一緒に排外主義ブルジョア國家的諸機關の中に入り込んでゐる。

組織委員會はチンマーワルトに忠誠を誓約するだけでなく、『あらゆるものに署名』してゐる。彼れ等はブレハノフ主義者と分離するばかりでなく、或る A. M. といふ匿名者に好きなことを言はせてゐる。即ちこの男は(邸門のかけに隠れるように匿名に隠れて)こう書いてゐる、『八月聯盟に結束してゐる吾人は、茲に次ぎの如く聲明する必要がある、『プリシフ』團體は、吾人の解するところによれば、わが黨において認容され得るものゝ限度を遙かに越えた。『プリシフ』を後援してゐる團體の所屬員は八月聯盟の組織の中に入れてはならぬ』と。『結束してゐる』A. M. の徒はこんな勇敢なものであつて、ちつとも隠し立てをしてゐない！

しかし組織委員會の『國外幹事部』を構成してゐる五名のうち、誰れもこんな向見ずな事はしたがない！ 故にこの五名の幹事は、ブレハノフとの絶縁に反對なのだ(アクセセルロッドは初めて簡単に、メンセヴィキのブレハノフは國際主義のポリセヴィキよりも自分にとつて好ましいと聲明した)が、この連中は勞働者を怖れてをり、自分等の名聲を傷付けたがらないので、そんな

ことはオクビにも出さないで、誰れや彼れやの匿名者を使つて、安つほい、危険のない國際主義を大威張りで振り廻させてゐるのだ。……

一面では個人々々の幹事、マルチノフやマルトフやアストロフは、『ナーシエ・ディエーロ』と論争してゐるし、それどころかマルトフは戦時工業委員會への参加に對して、個人的に反對を公言してゐる。しかし他面では吾々は、『ブンド』派の事實上の政策を反映してゐるコソフスキーよりも、自分の方が『左翼』だと考へてゐるヤノフ、従つてブンド派から自分等の國民主義を隱蔽するために利用されてゐるヤノフが、『舊來の戰術』(崩壞を誘致した第二インタナショナルの戰術)の『發展』を要求して、『何等この戰術の清算』を要求してゐないのを見る。編輯部はヤノフの論說に對して、曖昧無意味な、外交的な言逃れと言譯けとを書いてゐるだけで、この論說の内容に反對する言葉、『舊來の戰術』中の腐朽せる日和見主義的要素の擁護に反對する言葉は何も述べてゐない。然るに八月聯盟に『結束』せる匿名者 A. M. 連は、次ぎの如く『ナーシエ・サーリヤ』を直截に辯護してゐる。曰く、『ナーシエ・サーリヤ』は如何にも國際主義の立場から外れてはゐるが、しかしロシアのための舉國一致政策を『拒否』してきたし(?)、國際的關係の再建の必要を

認めてきたし、『吾々』の知れる限りでは、マニコフの議員團除名に賛同してきたと。見事を辯護だ! 小ブルジョア・ナロードニキだつて國際的關係の再建には賛成だし、ケレンスキーだつてマニコフに反對だ。『戦争に無抵抗』を聲明してきた人士のことを、舉國一致政策を拒否してゐるなどと主張することは、勞働者を空文句で欺くことだ。

組織委員會發行の合集の編輯部は、『危険なる諸傾向』といふ一論説を公けにしてゐる。これは政治的小器用の手本である! 一方では、愛國的激動狀の執筆者(モスコイおよびベテルスブルグの排外社會主義者の)に對する鳴りのよい急進的な言辭。他方では、これを承けてかういふことが言つてある、『この兩陳述書が如何なる『サークル』から發生したか、容易に斷言はできない』! 實際は『ナーシエ・ディエーロ』の『サークル』から出たことは些かも疑ひを容れぬ。尤も違法的新聞の同人は、當然違法的陳述書の作成には責任がないわけではあるが……。組織委員會同人はこの陳述書の精神的起源の問題や、この起源と解黨主義、排外社會主義の傾向と絶對的に同一のものであるといふ問題を、無意味な穿鑿と代へ、また、誰れが人身的にどつちのサークルの所屬員かといふような——警察より外に誰れにも興味がないような——問題と代へてゐる。一

方には編輯部は大聲をあげて、吾々は『國土擁護の傾向に對する旺盛な闘争』のために、『斷じて和解したい闘争』のために、隊伍を結ぶことを欲する、八月聯盟の國際主義者たる隊伍を、と叫んでゐる。他方では吾々はスグその後、こゝにいふイカサマ文句を讀む、『組織委員會によつて支持される議員團の方針は』(今までは)『何等公然たる反對に出會はなかつた』!!

しかしその方針の正體は、執筆者自身が熟知してゐるやうに、方針の缺如であり、『ナーシエ・ディエーロ』および『ラボ・ウトロ』の匿名辯護である。

合集中の『最急進的』な『最原則的』な論文、即ちマルトフの論文を取つて見よ。彼れの原則がどれだけのものであるかを知るには、彼れの主要思想を表現してゐる章句を研究すれば充分だ『現在の危機が民主主義××の勝利を誘致し、××××××してゐたら、性質が根本的に變化してゐたことは自明のことである。』これが一貫せる明白な嘘である。民主主義××と共和制とは、ブルジョア民主主義××であり、ブルジョア民主主義共和制であることは、マルトフは知つてゐなければならぬ筈である。ブルジョアの帝國主義強國間の戦争の性質は、その中の一國において軍國的專制的封建帝國主義が急激に掃かれたとした場合でも、微塵も變化するものではない。

けだしそれによつて純ブルジョアの帝國主義は消滅せずして、却つて力強くなるだけだからである。そこでわが機關紙は、第四七號の論策第九に次ぎの如く説いた。曰く、ロシアのプロレタリアの黨は、この戦争において共和派および革命家が、ブレハノフだの、ナロードニキだの、カウツキーだの、『ナーシエ・ディエーロ』の人士だの、チヘイゼだの、組織委員會だの、如く排外主義者である限りは、この共和派および革命家の祖國を擁護しないであらうと。

マルトフは第一一八頁の脚註の中でも、二枚舌的文句を決して捨てゝゐない。即ち彼れは第一一六頁の自分の叙述に對して、ブルジョア民主主義が『國際帝國主義に對して』戦ひ得るか否か『疑はしい』と言ひ、(戦ひ得ないことは分り切つたことだ)、ブルジョアジーは一七九三年の共和制を果してガンベッタおよびクレマンソーの共和制に轉化するか否か『疑はしい』と言つてゐる。この場合根本的な理論的虚偽は次ぎの點に存する。即ち一七九三年にはフランスにおけるブルジョア革命の進歩的階級が、ヨーロッパの先革命的王制と戦つた。然るに一九一五年のロシアは、自國よりおかれてゐる國々と戦争してゐるのでなく、社會主義××のホンの間際にある進歩した國々と戦争してゐるのだ。故に一七九三年のジャコバン黨の役割は、一九一四—一五年の戦争にお

いては、社会主義××　　以て遂行するところのプロレタリアートによつてのみ演じられ得る。従つて現在の戦争においてロシアのプロレタリアートは、次ぎの場合にのみ』

することができ、『戦争の性質が根本的に　　した』と見做すことができよう。即ち××がプロレタリアートの黨を×××地位に置き、この黨が×××精力と國家機關との全勢力を、ドイツおよびヨーロッパの社会主義プロレタリアートとの　　直接即刻の實現に向け得るようになった場合である。

マルトフは効能澤山の文句を弄んでゐる右の論説を、『政治的危機の開始に當つて明瞭な×××國際主義的立場を取るように』『ロシア社会民主黨』に訴へた極めて効能ある激勵を以て結んでゐる。もし讀者がこの効能澤山の看板のかけに、何か鼻持ちのならぬものがあるかないかを検査したければ、次ぎ　問題を出せよ。政治に一つの立場を占めるとは、一體どういふことであるか？　一、戦術上におけるその時機の完全な判断と一連の決議とを、團體（五名の幹事だけだとしても構はぬ）の名で發表すること。二、その時機の闘争標語を與へること。三、右の一つ一つを、プロレタリア大衆とその階級意識ある前衛との行動と結びつけることである。然るに『五

人組』の精神的指導者たるマルトフおよびマクセルロッドは、第一のことも、第二のことも、第三のこともしてゐないばかりでなく、右の三項において事實上排外社会主義者の支持を事とし、彼れ等の隠蔽を事としてゐる！　開戦以來十六箇月の間に五名の國外幹事は『明瞭な』立場も、一般に何等かの系統的な戦術上の立場をも取つて來なかつた。マルトフは左に揺れたり右に揺れたりしてゐる。アクセルロッドは右の方にだけ傾いてゐる。何等明瞭なもの、何等形づくられたもの、何等組織されたもの、何等の立場もそこにない！　マルトフは白から記して曰く、『今の時機の基本闘争標語は、ロシアのプロレタリアートにとつては、ツァーリズム並びに戦争を清算するための全露憲法議會でなければならぬ』と。この標語は何の値打ちもないものである。それは基本標語でもなければ闘争標語でもない。何故ならそれはこの二重的『清算』の最も大事な内容、即ち階級的社会的な、且つ政治的に確定された内容を含んでゐないからである。これは俗流のブルジョア民主主義的文句であつて、何等基本標語でなく、何等闘争標語でなく、何等プロレタリア的標語でなく。

最後に最も重要な點、即ちロシアにおける大衆の結合の問題において、マルトフおよびその一

味は、ゼロだけでなくマイナスを示してゐる。けだし彼れ等の背後には何者も控えてゐないからだ。選挙は大衆がブルジョアジーと『ラボ・ウトロ』との聯盟の背後にゐることを示した。然るに組織委員會やチヘイゼ派を看板に持つてくるのは、單にこのブルジョア聯盟を隠蔽してやることにすぎぬ。

組織委員會およびチヘイゼ派は独自の
方針を有するか

一九一六年二月十九日。(『ソチアル・デモクラット』第五〇號所載。)

組織委員會追隨者は彼れ等の合集において、そしてなほ明確には、一九一五年十一月二十七日にドイツ語で發行された國際委員會に對する報告書において、公衆に向つて、チヘイゼ派が徹頭徹尾國際主義的な、そして『ナーシエ・ディエーロ』の方針と異つた一個の獨自の方針を有してゐると説いて聞かせてゐる。この主張は眞赤な嘘である。第一に、吾々は組織委員會の成立（一九一二年八月）以來、四箇年間を通じて、チヘイゼ派および組織委員會が、『ナーシエ・サーリヤ』群とあらゆる根本問題において完全な政治的連帯を保ち、極く緊密な政治的協働を持してきたことを認めるのであつて、但しこの場合『ナーシエ・サーリヤ』群だけが或る系統立つた仕事（解黨派の日刊新聞といふ）を大衆の間に行つてゐたにすぎないのである。かくも親密な『友人』間に、本質的意見の相違が存在してゐるといふことは、言葉を以てではなく、嚴肅な事實を以て證明されなければならぬ。然るに、さういふ事實は、只の、一つも存在してゐない。第二に、一九二一—二四年の間引續いてチヘイゼ派は『ナーシエ・サーリヤ』の影法師の役をつとめ、系統的にその政策を擁護したことは、ベテルスブルグその他の地方の労働者が熟知してゐることであつて、チヘイゼ派は『ナーシエ・サーリヤ』『ルツチ』等の政策の變更に對して、何等かの影響をたゞの、一度も及ぼさなかつた。

大衆に關係をもつた政策、たとへば『ストライキ熱』の克服や、組合指導者や保險協會首腦者の選舉の場合には、『ナーシエ・サーリヤ』群が、そしてこの群だけが獨立に臨み、組織委員會とチヘイゼ派とはそれに補左役をつとめ、忠實且つ敬虔にその御用をつとめた。第三に、この一年間の戰爭中に、チヘイゼ派および組織委員會と『ナーシエ・サーリヤ』との間の、歲月と共に固められてゆくこの關係に變化が起きたことを證する、たゞ一つの事實さへもない。逆に、その反對の事實、剩へ公表され得ない事實が存在してゐる（これらの事實の大多數は公表され得ないものである）。組織委員會の方からもチヘイゼ派の方からも、『ナーシエ・ディエーロ』の政策に反對したことは、たゞの、一度もないことは事實である、だがこの政策に首尾よく變更を與へるためには、持續的な勝利的な闘争が必要だつたのである。けだし『ナーシエ・ディエーロ』は自由主義的親友によつて支持されてゐる政治上の立役であるに反して、組織委員會とチヘイゼ派とは政治上の添物だからである。『ウトロ』および『ラボーチエ・ウトロ』の兩新聞は、全然『ナーシエ・ディエーロ』の政策を追つてゐるのだが、その上に、チヘイゼ派と政治的に非常に接近し出し、八月聯盟全體の

名で物を言つてゐることは事實である。チヘイゼ派が『ラボー・チェ・ウトロ』のために集金を目論んでゐること、そしてチヘイゼ派全體がサマラの排外社會主義新聞『ナシ・ゴロス』に力を添へ出したことは事實である。チヘイゼ派の極めて名聲ある一員、即ちチヘンケリーが新聞雜誌で、即ち『國土擁護派』または排外社會主義者の雜誌『ソウル・ミール』やブレハノフおよびアレキシンスキー諸氏の雜誌で、徹頭徹尾ブレハノフ、『ナシ・デーロ』、カウツキーおよびアクセルロッドの精神で以て、原則上の議論を行つてゐることは事實である。吾々はすつと以前にチヘンケリーの陳述書を引用して論じたことがあるが、組織委員會もその合集の中でこの陳述書を承認してゐるなければ、トロツキーも彼れの『ナシ・スラヅァ』の中で承認してゐない、兩者はチヘイゼ派を擁護し、廣告しようとしてゐる癖に、第四に、全チヘイゼ派および全組織委員會の名を以てした直截な布告は、只々吾々の主張を確證するばかりである。組織委員會の合集に印刷されてゐる最も重要な布告、即ちチヘイゼ一味の陳述書と組織委員會の陳述書とを取つて見よう。この兩文書の立場は等しいものであり、その態度は同一である。組織委員會は吾々に對する『八月聯盟』の最高指導法廷であるから、そして組織委員會は一つの違法的告示を發布したのだから、即ち國會におけるチヘイゼよりも自由直截に語ることを得たのだから、特にこの告示を考察して見たい。

なほドイツの社會民主主義新聞、即ちベルン社會民主主義新聞で、この告示について論争が行はれたことは興味がある。ベルンの寄稿者はこれを『愛國的』と呼んだ。組織委員會の國外幹事部は憤慨して反駁文を公けにして、『わが國外幹事部もかゝる愛國主義を許してゐる』と説き、謂はゞ裁判官としてベルン新聞の編輯部に訴へて、これに告示のドイツ語全譯を交附した。しかし吾々からすれば、この新聞の編輯部が組織委員會に對して徹頭徹尾同感的態度を取り、これを勵ましてゐるのを認める。さてこの編輯部は何と説いたか？

『吾人は組織委員會の告示を通讀した』と、編輯部は記してゐる(第二五〇號)、『そしてこの本文は、疑ひもなく、誤解を惹起し易く、告示起草者の意とはかけ離れた意味を全體に附與し易いものであることを吾人は認めなければならぬ。』

組織委員會の人士は、折角この編輯部を裁判官としてこれに訴へながら、何故にこの編輯部の告白を合集の中に發表しなかつたのか？ けだしそれは組織委員會の友人の判決であり、しかも

組織委員會を公けに擁護することを拒んだものだからである！この判決は容體振つた外交的鄒重を以て作成され、特にアクセルロッドおよびマルトフに或る『受容さるべきこと』を語らうといふ編輯部の希望を力説してゐる。だが最大の『受容さるべきこと』は、即ち『おそらく』（たゞ、『おそらく』のみ！）といふ一語であつた。曰く、組織委員會は言はうと欲したことを言はなかつたのだらう、そして組織委員會が言つたことは、疑ひもなく誤解を生む恐れがあるだらう！！

吾人はわが讀者に對して、組織委員會の告示（これはブンド派の新聞にも掲載されてゐる）を一讀されんことを切に要求する。誰れでも注意深い讀者には、次ぎの如き簡單明瞭な事實が心に浮ぶだらう。一、告示はこの戦争中におけるあらゆる國土擁護を原則上否認する言葉を、只の一つも含んでゐない。二、告示の中には、排外社會主義者にとつて受納されないようなことは、何等——絶対に何等書かれてゐない。三、告示中の一連の意見はすべて、『國土擁護』と徹頭徹尾同一性質のものである。たとへば、『プロレタリアートは來るべき潰滅に對して、無關心な態度を取ることを得ない』（殆んど文字通りに同一のことが、『ラボーチエ・ウトロ』第二號にある、『國を潰滅から救ふことの利益』と）。曰く、『プロレタリアートは國の自存に深甚の關心を有する。』曰

く、『國民革命』は國を『』に相違ない云々。本統に排外社會主義に反對してゐる者なら、こんな意見の代りに、次ぎの如く言つたに相違ない——地主やブルジョアジイが、大口シア人によるポーランドの壓迫の維持を、この暴力的維持を、國の自存と呼んでゐる場合は嘘を言つてゐるのだ。彼れ等が強國たる特權を『救ひ出す』ための努力を、崩壞から國を救ひ出すといふ文句で以て紛飾し、かくしてプロレタリアートを、ブルジョアジイに對する鬭争からせよとする場合は、嘘を言つてゐるのだと。帝國主義戦争における交戦諸國のプロレタリアートの承認しながら、同時にこれらの諸國中の一國を『潰滅から』救ひ出すといふ文句を許容することは、偽はることであり、すべてこれらの陳述書を空つほな偽りの大言壯語たらしむることである。何故ならこれは、プロレタリアートの戰術を、その時機におけるその國の軍事的地位に依存させることを意味するからであつて、そうなればフランスの排外社會主義者が、オーストリアやフランスを『潰滅から』救ふことに力を籍してゐるのは當を得たことになる。

組織委員會國外幹事部は、ドイツ社會民主主義新聞（ベルン新聞）で、もう一つ詭辯を並べ立て

ゝゐる。これは無恥な、露骨な、そして特別にドイツ人を釣るために『按排』されたものであつて、組織委員会の人士は利口にも、この詭辯をロシアの公衆の前には出さなかつたのである。

即ちドイツ人を前にして高潔な憤激の調子で記して曰く、『プロレタリアートに對して、國を没落から救ふための唯一の手段として××をすゝめたのが、愛國主義だといふなら、吾人もさういふ愛國主義者である。吾人はインタナショナルが社會主義黨の中に、さういふ愛國主義者をヨリ多く有することを希望しただけだ。吾人はリープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグ、メレイムは、ドイツおよびフランスの勞働者に向つてさういふ告示を發する『愛國主義者』が、自分等の周圍にヨリ多くゐることを望むだらうといふ吾人の確信を披瀝したのだ。』

この欺騙のからくりは明白である。社會主義××に向つてゐる國のフランスやドイツには、敵に勝利を得るといふ名義で

めたブルジョア××精神も、さういふブルジョア社會運動も、その痕跡だに存しないことは、五名の幹事諸君は熟知してゐるところである。然るにロシアには、取りも直さずこの國がブルジョア民主主義××に向つてゐるが故に、さういふ運動が決定的に現存してゐる。然るに五名幹事は笑ふべき詭辯で以てドイツを欺騙してゐる。曰く、組織委員

會およびチヘイゼ一味は、ロシアにおいて革命的排外主義者たり得ない、何故ならヨーロッパにおいては××的精神と排外主義との結合はノンセンスだから！

然り、ヨーロッパではノンセンスである。だがロシアでは事實である。諸君は『プリシフ』記者を、劣悪なブルジョア革命家だといつて非難することはできよう。だが彼れ等の間には、彼れ等一流の流儀で排外主義が××的精神と結合してゐることを、諸君は否認することはできまい。ロシアにおけるナロードニキの七月會議や、『ナーシエ・ディエーロ』および『ラボーチェ・ウトロ』は、この點では全然『プリシフ』の立場に立つてをり、高々排外主義を××的精神と結びつけてゐるだけである。

チヘイゼ派とその宣言とは、これと同一の立場を取つてきた。吾々はチヘイゼの場合に、『崩壞の危険』を云々する同一の排外主義的文句を見出す。そしてチヘイゼがこの戦争の帝國主義的性質を是認し、『無併合の平和』、『全國的プロレタリアートの共同任務』、『平和のための戦争』等々を承認してゐるとすれば、同じく『ラボーチェ・ウトロ』も承認してゐるし、ロシアのナロードニキ、即ち小ブルジョアも承認してゐる。組織委員会の合集第一四六頁には、小ブルジョアの

ナロードニキは、戦争の帝國主義的性質をも、『無併合の平和』をも、『媾和を目的とする社會主義團體の國際的連帯を、できるだけ迅速に再樹立する』社會主義者の義務等をも認めた、といふ記事がある。ナロードニキ——この小ブルジョアの場合には、すべてこれらの文句は、彼れ等が直接に提起してゐる『國民的擁護』の標語を粉飾する役をつとめてゐるが、チヘイゼや組織委員會や、『ラボーチェエ・ウトロ』の場合は、この同じ標語が『崩壊に對する國土の救済』といふ名になる!!

つまりチヘイゼも組織委員會も、一群の革命的文句を放つたが、それは全然何事にも義務を負はず、また『ブリシフ』および『ナーシエ・ディエーロ』の人士の實質的政策の邪魔にならぬように心がけ、しかもこの政策のことを緘黙してきたといふ結果を見る。戦時工業委員會への参加は、何等かの形においてこの連中から支持されてゐる。

××についてはヨリ少い文句、實質的日常政策においてはヨリ多くの明瞭、卒直、信實、諸君は××家たることを約束してゐるが、今日労働者の戦時工業委員會参加を是認したり、乃至は暗黙のうちに参加者を庇護したりすることによつて、排外主義者、ブルジョアジー、ツァーリズムを

扶けてゐる。

マルトフは好きなことを試みるがよい。トロツキーは吾々の『分派根性』を罵つて、チヘイゼ分派中の誰れ彼れがトロツキーに『同意』し、左傾、國際主義等々を咀つてゐる事實を、この罵詈で以て隠蔽するがよい。(ツルゲネフ流の……飾言者の常套手段だ!) 事實は依然として事實である。組織委員會とチヘイゼ分派との間ばかりでなく、この兩國體と『ラボーチェエ・ウトロ』や『ブリシフ』との間にも、重大な政治的異見の痕跡は、少しもない。

それだからすべてこの連中は事實上一緒になつて進行し、無所屬労働者やナロードニキと共同して、吾々の黨に反對し、労働者の戦時工業委員會参加といふブルジョア政策に賛成してゐるのだ。しかし『同意を見てゐない』といふ『國外幹事部』の逃げ口上と斷言とは、吾々は『平和に賛成』で『戦争に反對』で、排外主義に浸されてゐないといふ、ジューデクム、レーギエン、ダヴッドの斷言と同じく、依然として大衆の事實上の政治には交渉をもたぬ空つぽな文句である。

ロシアのための日常合言葉としての
無併合平和とポーランド獨立とについて

一九一六年二月二十九日。『ソチアル・デモクラット』第五〇號所載。』

となる。そこに曰く、『戦争以來これまでの歲月は、ポーランドの國民の廣汎なる諸層の意識の中に獨立に對する強烈な希望を生んだ。』戦争以前には勿論そんな希望は存在してゐなかつた!! ポーランド民主主義の廣汎なる大衆の社會的意識の中には、『ポーランドの民族的獨立』の集團（おそらく誤植だらう、觀念とか思想とか言ふ意味）が勝利を得た。……『今やロシア民主主義の前には、ポーランド問題がその全範圍を以て提起されてゐる』……然るに『ロシア自由主義者』は『ポーランド獨立』といふ由々しい問題に對して、回答を與へることを單に拒んでゐる。

いま慘虐者ニコラス、フウオストフ、チェルノコフ、ミリュニコフ一味は全然ポーランド獨立に賛成であり、この合言葉は、ロシアからポーランドを奪取せるドイツに勝てといふことを實際上に意味してゐる今日、この一味は全精神を以てポーランド獨立に賛成である。記せよ、『ストリピン労働黨』（メテルスブルグ解黨派の合法團體の、と）の創立者等は、戦争前は徹頭徹尾民族自決に反對であり、ポーランド分離に反對であつた。ツァーリズムのポーランド壓迫を擁護するといふ此の高貴なる目的に、日和見主義者ゼムコフスキーが使用されてゐた。然るにロシアがポーランドを奪はれた今日では、彼等等はポーランドの『獨立』に賛成なのだ（しかしドイツには對抗する、

だがこのことは直接には緘黙されてゐる……）。

しかしながら諸君はロシアの階級意識ある労働者を欺瞞するわけには行かないだらう、排外社會主義者諸君!、諸君のポーランド獨立並びに無併合平和の標語は、實際上ではツァーリズムに對するお追従なのであつて、ツァーリズムは今日、取りも直さず一九一六年二月の今日、『無併合平和』（ヒンデンブルグをポーランドより驅逐せよ）、ポーランドの獨立（ウィルヘルムからの獨立）、ニコラス二世への隷屬）といふ美しい文句で、ツァーリズムの戦争を粉飾することが必要なのだ。

自己の綱領を忘却しないロシア社會民主黨員なら、これと違つた立論をする。彼れはこう言ふだらう、ロシア民主主義は取りわけ、且つ一番多く大ロシアの民主主義を眼中に置く。けだし大ロシアの民主主義のみがロシアで古くから言論の自由を享有してをり、ロシアが現在ではポーランドを壓迫し抑壓してゐないことによつて、この民主主義は決定的に得をした。ロシアのプロレタリアートは、昨日まではまだ諸民族の壓迫に力を籍してゐたのに、現在はその諸民族を何等壓迫してゐないことによつて決定的に得をした。これに反してドイツ民主主義は決定的に損をした——ドイツのプロレタリアートがドイツのポーランド壓迫を許す限りは、そのプロレタリアート

の地位は奴隷の地位よりも、他の仲間に対する束縛を支持してゐる賤民の地位よりも、劣悪なものとなるだらう。疑ひもなくドイツのユンケルとブルジョアジーだけが得をしたのである。

そこから次ぎの結論が生ずる。曰く、今日ロシアで『無併合平和』だの『ポーランド獨立』だのといふ合言葉が提起されてゐる場合、ロシア社會民主主義者は民衆に對するツァーリズムの欺瞞の正體を暴露しなければならぬ。何故ならこの二つの合言葉は今日の事態の下においては、戦争を繼續せんと努力することを意味するからである。吾々は次ぎの如く言はねばならぬ——ポーランドのための戦争を行ふな！　ロシア國民は再びポーランドの抑壓者たることを欲しないと！　しかしながら如何にしてドイツよりのポーランドの解放を促進すべきか？　促進してはならぬいだらうか？　もとより促進しなければならぬ。しかしながら帝國主義戦争を支持すること、ツァーリズムロシアにしる、ブルジョア制にしる、乃至はブルジョア共和制ロシアにしる、それを支持することによつては、なく、ドイツの革命的プロレタリアートを支持することによつて、ドイツ社會民主黨中においてジューデウム、カウツキー一味の反革命労働者黨派と戦つた分子を支持することによつて、そうしなければならぬ。カウツキーは最近になつて初めて反革命的氣もちを特に明

瞭に示してきた。彼れは一九一五年十一月二十六日には街頭示威を『冒險』と呼んだ(丁度スツルーズが一九〇五年一月九日以前には、ロシアには革命的民衆は存在しないと主張したように)、ところが一九一五年十一月三十日にはベルリンに一萬の婦人労働者が示威運動を行つた！

何人たるを問はず、正直に、即ちブレハノフのようでなく、カウツキーのようでなく、民族の自由、民族自決權を認めようとする人は、ポーランド抑壓のための戦争に反對し、現在ロシアから抑壓されてゐる民族、即ちウクライナ、フィンランド等の、ロシアからの分離の自由に賛成しなければならぬ。何人たるを問はず本統に排外社會主義者たらざること欲する人は、あらゆる國の社會主義黨の中で、今日すでに自國のプロレタリア××××××××××てゐる分子だけを支持しなければならぬ。

『無併合平和』でなく——プロレタリアートおよび勤勞者とは平和、ブルジョアジーとは戦争である！

ウィルヘルム・コルブとゲオルヒ・ブレハノフ

一九一六年二月二十九日。(『ソチアル・デモクラット』第五〇號所載。)

ドイツの大びらな日和見主義者ウィルム・コルプの小冊子『岐路に立てる社会民主主義』カ
ルスルーエ、一九一五年刊は、ブレハノフの文集『戦争』（ロシア語）が現はれた後の恰好な時
機に公けにされた。カウツキー派のルドルフ・ヒルファディングは、『ノイエ・ツァイト』でコルプ
をまことにお手柔かに駁論してゐる。即ち彼れは一番肝心な點を緘黙し、ドイツ社会民主黨の一
致は單に『純形式的』に残つてゐるにすぎぬといふコルプの正當な注意を嗟歎してゐる。

第二インタナショナルの崩壞の意義について眞面目に考へてゐる人々には、コルプとブレハノフ
との精神的立場を比較することをすゝめたい。兩者は（カウツキーも同様）根本原則において一
致してゐる！現在の戦争と關聯させての××× の思想を拒否し、嘲笑してゐる點において。
また兩者はブレハノフ主義者の愛用語を使つて、革命的社會民主主義者の『
』を非難し
てゐる。この戦争と關聯させての×××の思想を『幻想的空文句』と呼んでゐるブレハノフは、『革
命的用語法』に對して喰つてかゝつてゐる。コルプは『革命的的空文句』、『革命的幻想』、『過激派』、
『ヒステリー患者』、『宗派根性』等々と悪口ついてゐる。コルプとブレハノフとは本質的な點で一
致してゐる。兩者とも革命に反對してゐる。そしてコルプは一般に革命といふものに反對してゐ

るのに反して、ブレハノフとカウツキーとは『一般には賛成』であるといふ事情は、濃淡の相違、
言葉の相違にすぎないのであつて、實際にはブレハノフとカウツキーとはコルプの補助者なので
ある。

コルプは個人的意味でなく政治的意味において、比較的正直である。即ち彼れの態度の徹底は
偽善を生み出さない。それだから彼れは、全インタナショナルは——彼れの立場からすれば——
『革命的幻想』の精神にとり憑かれ、開戦に對して『威嚇』を以て働いた（×××の威嚇なのだ、ブレ
ハノフ並びにコルプ君！）といふ眞理を認めるのを憚らない。ヨーロッパの社會民主黨が資本主義
社會秩序の擁護者となつた以上は、即ち『それ（社會民主黨）がバラバラに飛散して、その存在が
疑問となつた瞬間には』、資本主義社會秩序の『原則的否定』は無意義である（第三二頁）と、コル
プが言つてゐるのは正しい。この客觀的革命的形勢の認識は適切である。

『もし社會民主黨がリープクネヒトを中心とするドイツ労働階級の否定政策を採用して、『原則
的』根據から戦時豫算を拒否したとしたら、ドイツ労働階級は一體どうなつたらう？ その結果
はドイツ國民の間に内部的闘争が沸騰點まで高まり、それと共にドイツ國民が軍事上にも政治上

にも衰弱したゞらう』(第五〇頁)。……『三國同盟帝國主義』の利益と勝利とのため!! これこそ『』に反対する日和見主義的叫喚の基點なのだ!!

これが事實上問題全體の基點なのである。『××××××××××××××××××』とは即ち××である。左翼の戦術はそれを誘致するとコルプが言つたのは正しい。それはドイツの『軍事のおよび政治的衰弱』を誘致する、即ちドイツを希望し促進することは敗北主義だと、コルプが言つたのは當を得てゐる。コルプは××××××××××××××××××の國際的性質を認めたらぬ點だけが——この點だけが——不當である。あらゆる交戦國において『××××××××××××××××××高上』や、帝國主義ブルジョアジ―の『軍事的勢力の衰弱』や、帝國主義戦争の××××××移動が可能である。吾人はコルプに對してその有益な忠告、告白、考察を感謝する。すべてこれらのものは徹底的な、正直にして卒直な革命反對者の口から出たといふ點において、プレハノフおよびカウツキーの卑しむべき虚偽と貧弱な無性格とを、労働者の前に暴露する上に特に有用である。

『平和綱領』について

一九一六年三月二十五日。(『ツチアル・デモクラット』第五二號所載。)

『チンマーワルト派』の第二回國際會議に上程された最重要問題の一つは、社會民主主義的『平和綱領』の問題である。讀者を即座にこの問題の本質に導き入れるために、インタナショナルの最も規準的な代表者たり、萬國排外主義者の最も有力な擁護者たるカウツキーの此の點に關する説明をかゝげたい。

『インタナショナルは何等實効ある戰闘機關ではない。それは本質において一箇の平和機關である。……平和のための闘争、平和における階級闘争。』『ノイエ・ツァイト』一九一四年十一月二十七日、第二四八頁、第二五〇頁。『これまでインタナショナルの内部で作成されたすべての平和綱領、コペンハーゲンの綱領、ロンドンの綱領、ウインの綱領、すべてこれらの綱領は民族獨立の承認を要求してゐる、そしてそれは正當である。この要求は現在の世界戦争における吾々の尺度を形づくるべきものである』(『ノイエ・ツァイト』一九一五年五月二十一日、第二四一頁)。

この僅かな言葉の中に、排外主義者の國際的合意および協調の『綱領』が見事に表明されてゐる。ドイツ帝國主義を『祖國擁護』の形で、全然ジューデクムの精神を以て擁護したジューデクムの友人および追隨者が、ウインで會議をしたことは誰れでも知つてゐる。そして『自分等の』國の

帝國主義を同一の口實を以て擁護したフランス、イギリス、ロシアのジューデクムの徒はロンドンで會議した。ロンドンにしろウインにしろ排外社會主義の主人公どもの實際の政策は、帝國主義戦争参加を是認することであり、フランス労働者によつてドイツ労働者を、或ひは逆にドイツ労働者によつてフランス労働者を××××のを、どつちの國のブルジョアジーが諸外國の掠奪に首位を占めるかといふ名において是認することである。そしてこの事實上の政策を粉飾し、労働者を迷はすために、ロンドンおよびウイン會議の主人公どもは、吾等は『民族の獨立』を認めてゐるのだ、別な言葉でいへば、民族の自決權を認めてゐるのだ、併合を拒否してゐるのだといふ空文句を使つてゐる。

この『承認』は飛んでもない嘘であり、卑しむべき偽善であることは火を睹る如く明白である。けだし民族の獨立でなく民族の拘束に、双方の側で役立つところの戦争参加が是認されてゐるからである。そして今度は規範を與へるカウツキーがやつてきて、この偽善の化けの皮を剥ぎ、その正體を發見し、これに烙印を捺すことはせず、その偽善を神聖化してゐる。社會主義を抛棄せる排外主義者が労働者を欺かうとする一心同意の努力は、カウツキーにとつては、平和問題に

關するインタナショナルの『一心同意』と活動能力とを立證する役に立つてゐる!! 労働者にとつては一目瞭然たる、國民的な、露骨な、明々白々たる虚偽を、カウツキーは、労働者の眼をくりますところの、國際的な、洗練された、隠掩された虚偽と化してゐる。カウツキーの政策は労働者運動にとつて、ジューデクムの政策に比して百倍も有害であり危険である。カウツキーの虚偽は百倍も胸糞の悪いものである。

だがこれは獨りカウツキーだけのことではない。けだしこれと同一の政策を、ロシアでアクセルロッド、マルトフ、チヘイゼも行つてをり、フランスでロンゲとプレスメン、イタリアでトレヴェスも行つてゐるからである。この政策の客觀的意義は、この政策が労働階級の中でブルジョア的虚言を支持し、プロレタリアートの中でブルジョア的觀念を奨めてゐる點にある。ジューデクムとブレハノフとがそれ／＼『自國』の資本家のブルジョアの虚言だけを繰返してゐることは明白ではあるが、カウツキーがこれと同一の虚言を神聖化して、『一心同意』のインタナショナルの『高級の眞理』に高めてゐることは、それほど明白になつてゐない。そしてブルジョアジーは、取りも直さず労働者がジューデクムやブレハノフといふ連中の規準的な、一心同意の『社會主義者』と考へ、

只一時の間分れてゐるにすぎないと見做すことを必要とするのである。ブルジョアジーが必要とすることは、平和に關する虚偽の文句で以て、戦争中の××××××といふ無責任な空文句で以て労働者の注意を××××××、労働者を、かすつけ、『無併合平和』だの、何だのといふことであつておくことに外ならぬ。

ユイスマンは仲裁裁判だの、對外政策の民主化だのといふことを附加して、單にカウツキーの平和綱領を通俗化したゞけであつた。だが社會主義的平和綱領の第一の且つ根本的な條項は、プロレタリアに對するブルジョアの感化を強めることを意味するところの、カウツキーの平和綱領における虚偽を暴露することではなければならぬ。

カウツキー派によつて改悪されてゐる社會主義教説の根本概念を想起しよう。戦争は交戦諸國の支配階級によつて戦争前久しく行はれてゐた政策の、強力手段を以てする繼續である。戦争は戦争行動によつてつくり出されたところの、敵側の勢力關係における變化を含めての、この同一政策の繼續である。それ自體としては戦争は、戦争前の政策が發展した方向を變更するものでなく、單にこの發展を促進するだけのものである。

の要求のために偽りなしに戦つてゐるのだ、何故なら客觀的歴史の形勢は、この要求を社會主義
××
に對するブルジョア的胡魔化しの役に立つてゐる『尺度』^{コンパス}を考へて見よ。

曰く、ジューデウムとプレハノフとは『平和綱領』において『一心同意』してゐる。即ち併合に
反對で、民族の獨立に賛成ではないか！

そして見給へ、ジューデウムがポーランド、フィンランド等に對するロシアの關係は、領土併合
的關係だと言つたのは正當であるし、プレハノフがエルザス・ロートリンゲン、セルビア、ベルギ
ー等に對するドイツの關係を同じくそう呼んでゐるのも正當だ。兩方とも正當ではないか？ そ
してカウツキーはドイツのジューデウムとロシアのジューデウムとを調停してゐるのだと！

しかし考へのある労働者は、カウツキーも兩方のジューデウムも嘘つきだといふことを即座に
認める。これは明白なことである。社會主義者たらんと欲するなら、嘘つばちの民主主義と和解せ
ずに、その面皮を剝がなければならぬ。如何にして面皮を剝ぐべきか？ 造作もないことだ、民
族的獨立の『承認』は、壓迫民族の代表者が、戦争前にも戦争中にも、彼れ等自身の『祖國』か

ら壓迫されてゐた民族の獨立を要求した場合にのみ、正直なものと名づけ得るのである。

この要求のみがマルクス主義に合致する。マルクスはブリテンのプロレタリアートの利益から
出發してこの要求を提出した。即ち彼れはアイルランドの自由を要求し、且つこの場合アイルラ
ンド分離後に聯邦組織の見込があると考へた。言ひかへれば彼れは分離の自由を、分散および分
立のために要求したのでなく、ヨリ鞏固な、ヨリ民主的な結合の目的で要求したのである。××
××××民族と××××民族とが存在する場合、××××××的民族と××××××的民族とを
分つ特別の事情が缺けてゐる場合（たとへば十九世紀の四〇年代はさうであつた）、さういふ場合
にはすべて、アイルランドに關するマルクスの政策は、あらゆるプロレタリアの政策××××××
××××××されねばならぬ。そして帝國主義とは取りも直さず、××××××××××××××××
××××××民族の分割が本質であり典型である時期、そして××××××××××××××××××××
××××××では全然不可能となつてゐる時期の謂ひである。

わが黨はすでに一九一三年に民族問題に關する決議で、社會民主主義者に對して、自決の概念
をこの意味に用ゐる義務を負はせた。そして一九一四—一六年の戦争は充分に吾々の正當なるこ

とを證した。

一九一六年三月三日の『ノイエ・ツァイト』所載のカウツキーの論説を取つて見よ。彼れはドイツ系オーストリアの周知の極端排外主義者にして排外主義的なウインの『アルバイター・ツァイツング』の主筆たるアウステルリッツに、正面から賛同して曰く、『一民族の獨立をその民族の主權と混同してはならぬ』と。別な言葉でいへば、被壓迫民族については『民族國家』内の民族的自治を要求すれば充分であつて、政治的獨立に對する同權を要求する必要がない。そして同じ論説の中でカウツキーは主張して曰く、『ポーランドにとつてロシアの國家組織に屬することが必要事である』といふことは、何人も立證するを得ない!! (第七〇七頁。)

これは何を意味するか? 即ちカウツキーはヒンデンブルグ、ジュードクム、アウステルリッツ一味の氣に入るために、ロシアが『民族國家』であるのにポーランドのロシアからの分離の自由を認めてゐる、といふことを意味するのであつて、ポーランドのドイツからの分離の自由については、彼れはどこまでも緘黙してゐる!! 同じ論文の中でカウツキーは、フランスの社會主義者が戦争によつてエルザス・ロートリンゲンの解放を成就しようといふことを根拠

として、彼れ等の國際主義の背棄を非難してゐる。ドイツのジュードクム一味が、エルザス・ロートリンゲンのドイツからの分離を要求することを拒絶してゐるのは、國際主義を抛棄してゐるのだといふことについては、カウツキーは緘黙してゐる!

『民族國家』といふ一語は、アイルランドを考へる場合にイギリスに對しても使用できるし、ポーランド、エルザス等を考へる場合にドイツに對しても使用することができる———といふ性質の『民族國家』といふ一語を、カウツキーは排外社會主義の公然たる是認のために利用してゐる。『併合に反對する闘争』をカウツキーは……排外主義者との……『平和の綱領』にまで高め、これを飛んでもない嘘つばちのものたらしめた。同じ論説の中にカウツキーは、『とはいへインタナショナルは國境の變更のために關係住民の同意を要求することを決して罷めたことはなかつた』(第七〇九頁)といふ、耳ざはりのよい虚言を繰返へしてゐる。ジュードクム一味がドイツへの併合に對するエルザス人やベルギー人の『同意』を要求することなく、アウステルリッツ一味がオーストリアへの合併に對するポーランド人やセルビア人の『同意』を要求してゐないのは明白ではないか?

そしてロシアのカウツキー派たるマルトフは？ 彼れは『ナシ・ゴロス』(サマラ)紙上で、民族自決といふ、これだけのことから、帝國主義戦争における祖國擁護といふことは生ずるものではない、といふ争ふべからざる眞理を立證しようとする。だがロシア社會民主主義者が、大ロシア人から抑壓されてゐる諸民族の分離の自由を要求しない場合は、民族自決の原則を抛棄してゐるのだといふことについては、マルトフは口を噤み、かくしてアレキシンスキー、グウ、ステフ、ポトレツフ、ブレハノフに對して和睦の手を差し伸べてゐる！ マルトフは違法的新聞でこのことを緘黙し通してゐる！ マルトフはオランダのゴルテルと論争してゐるがゴルテルは誤つて民族自決を否定してはゐても、これを正當に適用してゐて、オランダ領インドの政治的獨立を要求してをり、それに同意してゐないオランダの日和見主義者に對して、社會主義に對する裏切りの罪を負はせてゐる。然るにマルトフは、同僚の幹事ゼムコフスキーが、一九二一年五年に解黨派新聞に唯一の人としてこの問題について書き、民族の分離權を否認し、一般に自決權を否認したのに、これに對しては論争しようとはしない！

マルトフはカウツキーと同じくイカサマ的に民族自決を『擁護』してゐるのは明白ではないか？

同じく排外主義者と和解せんとする希望を粉飾してゐることは明白ではないか？

そしてトロツキーは？ 彼れは誠心を以て民族自決に賛成してゐるが、彼れにあつてはこれは空文句となつてゐる。けだし彼れは、當該社會主義者の『祖國』から抑壓されてゐる諸民族の分離の自由を要求してゐないからであつて、彼れはカウツキーおよびカウツキー派の偽善について、終りまで緘黙してゐる！

こゝにいふ『併合反對の闘争』は、勞働者を騙ることであつて、社會民主主義者の綱領を解説することではなく、逃口上であつて、インタナショナル主義者の義務および責任に對する具體的指摘ではなく、國民主義の偏見とその獨立的利益とに對する承認であつて、『吾々』はすべて、ブルジョアでも排外社會主義者でも、『吾々』の祖國が一民族を抑壓することに『利得』を有してゐる！ 國民主義者に對する闘争ではない。

社會民主主義の『平和綱領』は、何よりもまづ平和に關するブルジョア的、排外社會主義的、カウツキー的文句の中に虚偽を發見することに存する。これが第一番の、且つ最も根本的なことである。でなければ吾々は大眾の欺瞞者の、心からの、または心ならずの幫助者なのである。吾々

單獨講和について

一九一六年十一月六日。(『ソチアル・デモクラット』第五六號所載。)

ロシアとドイツとの間には、すでに單獨講和の交渉が行はれてゐる。この交渉は公式のものであつて、主要な點では兩國ともすでに一致してゐる。

此の頃こゝろいふ記事が、ベルン社會主義新聞の入手せる報道を基礎として、その紙上に現はれた。そしてベルンにおけるロシア使節が急いで公式の取消を發表し、フランスの排外主義者はかゝる噂の弘布を、『ドイツが嗅ぎつけてゐる』といふ事情に歸したとき、この社會主義新聞はこの取消に何等かの意義を置くことを拒み、目下スキスにはドイツの『爲政家』(ビュローウ)とロシアの『爲政家』(スチュルメル、ギエルス、およびスペインから到着せる一外交官)が存在してゐるといふ事實、スキスの商業界にはロシアの商業界から出た、これと似寄つた積極的報道が行はれてゐるといふ事實をあげて、新聞記事の保證とした。

單獨講和に關する交渉の事實を公然と白狀するわけに行かぬロシアの方からも、本統に交渉が行はれたと否とに係りなく、またこの交渉がどの程度まで成功したに係りなく、ロシアとイギリスとを仲違ひにさせる企てを行ふ必要のあるドイツの方からも、欺瞞の手練手管が行はれ得ることとは自明のことである。

單獨講和の問題に方針を見出すためには、現在スキスに行はれてゐるような、そしてその正しいかどうかを吟味することは、事柄の性質上不可能である風聞や消息から出發すべきでなく、過去數十年の否認すべからざる明確な政治的事實から出發しなければならぬ。現在ブリシケウイチやミリューコフのそばで似而非マルクス主義的従僕または愚人の役を演じてゐるブレハノフ、チヘンケリー、ポトレソフの一味諸君は、『ドイツの責任』とロシア側の戦争の『防禦的性質』とを立證するために、如何に腐心しようとも——階級意識ある勞働者はこれらの愚人の言に耳を傾けなかつたし、今も耳を傾けてはゐない。戦争は強大國相互間の帝國主義的關係によつて、即ち獲物分配の鬭争によつて、何人があれやこれやの植民地および弱小國家を併呑するかといふ鬭争によつて、生じたものであつて、この場合この戦争には、二つの利害の抗争が正面に現はれてゐる。第一に——イギリスとドイツとの抗争。第二に——ドイツとロシアとの抗争——この三つの強大國、この三人の追剝が、現在の戦争における三人の大立物なのであつて——あとの残りは獨り立ちでない同盟者なのである。

この二様の抗争は戦争前幾十年の間を通じて、この三國の全政策によつて準備されてゐた。イ

ギリスはドイツの植民地を掠奪し、彼れの主要競争者を減ほし得るために戦つてゐる——この競争者はその大規模な技術や組織や商業的精力を以て、容赦なくイギリスに打撃を加へ、そのためにイギリスは戦争なしでは自己の世界支配をもはや維持することができなくなつたのである。ドイツはその國の資本家が、植民地および屬國の掠奪において世界に冠たるべきブルジョアジーの『神聖なる』權利を有すると考へてゐるが故に——そう考へるのは當を得てゐるのだが——そのために戦つてゐる。そして取りわけドイツはバルカン諸國とトルコとを征服するために戦つてゐる。ロシアはガリシアを得るために戦つてゐる——ロシアは主としてウクライナ民族を抑壓するためにガリシアを占領する必要があるのだ（ガリシヤを外にしてはウクライナ民族にとつては、自由——と言つても勿論比較的話だが——を享有し得るどんな隅つこの土地も存在しなかつたし、また存在し得なかつた）——またアルメニアを得るために、コンスタンチノープルを得るために、そしてまたバルカン諸國を征服するために戦つてゐる。

然るにロシアとドイツとの掠奪的『利害』の衝突と同時に、それに勝らずとも劣らない利害の對立が、イギリスとロシアとの間に存してゐる。ロシアの帝國主義政策の任務は、列強の數世紀

間の敵對と客觀的國際的交互關係とによつて規定されてゐるのであるが、この任務を簡単に次ぎの如く特徴づけることができる——イギリスおよびフランスの助力によつてヨーロッパでドイツに打撃を與へて、オーストリアとトルコとから掠奪すること（オーストリアからはガリシアを、トルコからはアルメニアと、主としてコンスタンチノープルとを奪取する）。次ぎに××とこの同じドイツとの助力によつてイギリスに打撃を加へて、ベルシヤ全體を併合したり、支那の分捕りを完成したりすること。

ツァーリズムはすでに數世紀以來コンスタンチノープルの占領にも、アジアにおける占領地帯の増大にも努力してゐて、それに相應せる政策を系統的に行ひ、列強間のあらゆる對抗と利害の衝突とをこの目的に利用してゐる。イギリスはズツト昔からこのロシアの努力に對して、ドイツよりも遙かに頑強で有力な敵手となつた。一八七八年にロシアの軍隊がコンスタンチノープルに接近し、イギリスの艦隊がダーダネルスに現はれて、ロシア人が『ツァーリグラード』（ツァールの都市——コンスタンチノープルに對する古代ロシアの名稱）に姿を現はしたら最後ロシア人に發砲すると威嚇した時以來——それから一八八五年に中央アジアにおける獲物の分配のために間一髪でロ

シアとイギリスとの間に戦争が起きようとした時にいたるまで（アフガニスタン事件——ロシアの軍隊が中央アジア内地に移動することは、インドにおけるイギリスの支配権の脅威であつた）——それから一九〇二年にロシアに對する日本の戦争を準備するためにイギリスが日本と同盟を結んだ時まで——この永い年月の全體に亘つて、イギリスはロシアの強奪政策の最も力強い敵手であつた。けだしロシアは幾多の外國民族に對するイギリスの支配權を覆へず危険があつたからである。

そして現在は如何。この戦争に現はれてゐることを見よう。プロレタリアートからブルジョアジーに移つた『社會主義者』が、この戦争におけるロシアの『祖國擁護』だの、『國土の救済』（チヘイゼの言）だのと語つてゐるのは、聽くに耐えなくなつてゐる。また胸の悪いカウツキー一味が民主主義的平和を説いて、現在と限らず一般にブルジョア政府がさういふ平和を締結し得るかのように述べてゐるのは聽くに堪えない。事實においてこれらの政府は自己の締盟國と、そして締盟國に對抗して、秘密條約の網の中に互ひに編み込まれてゐるのであつて、この條約の内容は決して偶然のものでなく、單に『惡意』によつて規定されてゐるのでなく、帝國主義的對外政策の

發展の全道程に依倚してゐるものである。それ自體としては結構な事柄（祖國擁護、民主主義的平和）に關する胸糞のわるい文句で以て労働者の眼に砂を投げ込み、頭腦を迷はせ、諸外國の強奪を狙つてゐる自國政府の秘密條約を暴露することをしない『社會主義者』——かゝる『社會主義者』は社會主義を裏切つてゐるのである。

ドイツにしろ、イギリスにしろ、ロシアにしろ、政府にとつては、社會主義者の陣營から結構な平和に關する話が聞えてくるのは専ら都合のことである。けだし第一に、これによつて今日の政府の下でかゝる平和が可能だといふ信念が喚び起されるから、第二にこれによつて、この政府の強奪政策から注意が他に轉ぜられるからである。

戦争は政策の繼續である。そしてまた政策は戦争中にも『繼續』される！ ドイツはブルガリアおよびオーストリアと、獲物の分配に關する秘密條約を結んだ、そしてかゝる商議をなほ繼續してゐる。ロシアはイギリス、フランス等と秘密條約を結んだ、そしてすべてこれらの條約は掠奪を目的とし、ドイツの植民地の強奪、オーストリアの劫掠、トルコの分割等を目的としてゐる。

『社會主義者』がかゝる事態の下に國民および政府に對して結構な平和を説いて聞かせてゐるの

友誼を欲してゐる、といふ風に事情を説明してゐるのは、政治的赤ん坊の水準に相應したお伽噺である。事實上はツァーリズムでも、ロシアの反動派でも、同じく『進歩的』ブルジョアジー（オクトブリストとカデット）でも、只一つのことを希望してゐる、即ちドイツ、オーストリア、トルコをヨーロッパで掠奪し、イギリスをアジアで敗ること（ベルシヤ全體、蒙古全體、チベット全體を併呑するため）である。これらの『親友』どもは、如何にして且つ何時、ドイツに對する鬭争からイギリスに對する鬭争に移るべきかといふ點でのみ争つてゐるにすぎぬ。意見の相違は如何にして且つ何時そうすべきかといふ點に存するだけだ！

親友間におけるこの只一つの論争問題の決定は、軍事的および外交的商量に依倚するものである。そしてこれらの商量はツァール政府にのみ完全に知られてゐるのであつて、これに反してミリーコフおよびグチコフの徒には四分の一位しか知られてゐない。

ドイツおよびオーストリアから全ポーランドを奪取する！ ツァーリズムはこれに賛成してゐるが、そのために勢力が足りるだらうか？ そしてイギリスはそれに承認を與へるだらうか？

コンスタンチノーブルと海峡（ダーダネルス）を奪取する！ オーストリアを完全に敗つて、そ

の分割に取りかゝる！ ツァーリズムは完全にこれに賛成してゐる。だが勢力が足りるだらうか、且つそれにイギリスが承認を與へるだらうか？

ツァーリズムは、幾百萬の兵卒が現存してゐるか、そしてなほどれだけを民衆から要求し得るか、どれだけの軍需品が使用されてゐるか、どれだけのものをなほ補充され得るかを知つてゐる。ツァーリズムはコンスタンチノーブルに關する、並びにサロニキ、メソポタミヤ等におけるイギリス軍隊の兵力に關して、如何にしてイギリスとの間に秘密協定が行はれたか、且つ行はれつゝあるかを知つてゐる。ツァーリズムはすべてこれらのことを知悉し、すべてのカードを握つてゐて、何處のあたりに胡亂な事柄、不安な事柄が起きる機會、『戰運』の機會が特別に増大してゐるかを、精密に——一般にこゝにいふ事柄について精密な知識が可能である限り——打算してゐる。

然るにミリーコフおよびグチコフの徒は、知ること愈々少くして、空しく説法することのみが愈々多い。ところがプレハノフ、チヘンケリー、ポトレソフとくると、ツァーリズムの秘密協定のことを一般に少しも知らず、以前には知つてゐたことすら忘れてしまひ、外國新聞から見聞し得ることを研究せず、戦前におけるツァーリズムの對外政策の經過を穿鑿せず、戦争中の經過を究は

めず、従つて單なる社會主義的道化役を演じてゐるにすぎぬ。

ツァーリズムは、自由主義者からの助力にも拘らず、戦時工業委員會の熱心にも拘らず、ブレハノフ、グウォスデフ、ポトレソフ、ブルキン、チルキン、チヘイゼ（『國土の救済』元談ではない）、クラポトキン、およびその他の家來諸君の協働にも拘らず、——すべてこれらのものにも拘らず、そしてでき得る限り同盟國を戦争に引き入れたに拘らず現在の軍事的勢力の狀態にあつては、もつと大きなことを成就すること、ドイツをもつと手厳しく打ち敗ることは不可能であるか、乃至は法外に高價につく（たとへば、なほ一千万のロシア兵卒の損失を値ひするだらうし、その補充、養成、武装のためになほ幾十億かの金と幾年かの戦争とが必要となるといふような）———そういうふことをツァーリズムが信ずるに至つたとしたら、ツァーリズムはドイツと單獨講和を求めざるを得なくなる。

『吾々』がヨーロッパで大きな獲物の一つを追跡するなら、『吾々』は結局軍事的資源を弱め、ヨーロッパで何ものをも成就せずして、アジアにおける『吾々のもの』を維持する可能性を失ふ危険がある——と、ツァーリズムは勘考する、そしてこの勘考は帝國主義的利益から見れば正當であ

る。このツァーリズムの勘考は、ブルジョア的および日和見主義的饒舌家、ミリューコフ、ブレハノフ、グチコフ、ポトレソフの勘考に比してヨリ正當である。

ルーマニアおよびギリシヤを勢力圏内に入れた後は（『吾々』はできるだけのもはこの兩國から取つた）、ヨーロッパで最早やこれ以上のことを成就し得ないとすれば、吾々はできる限りのものを取り込むことを欲する！ イギリスは見たところ『吾々』に何物をも與へ得ない。ドイツは多分クールランドとポーランドの一部とを返してくれるだらう、そしておそらく東部ガリシヤをも返してくれるだらう（これはウクライナの運動を鎮壓し、歴史的に今日までなほ眠つてゐる數百萬を算するウクライナ民衆の、自由および民族語に對する迫進を抑へつけるために、『吾々』にとつて特に重要なものである）、また屹度トルコ領アルメニアをも返してくれるだらう。これらのものを現在取れば吾々は力強くなつてこの戦争を済ますことができる、そして明日は××およびドイツの力をかりて、そしてイギリスに對する戦争の場合に、『愛すべき祖國』の『救済』の折りに、ミリューコフ、ブレハノフ、ポトレソフの賢明なる政策と、引續いての助力とを得て、アジアの良い部分を手に入れることができる（ベルシヤ全體と大洋への出口を有するベルシヤ灣、これ

は地中海への出口しかないコンスタンチノープルの場合とは違ふ、その上に後者の場合には島嶼を通過しなければならぬのであつて、この島嶼はイギリスが容易に占領して固めることができる。即ち『吾々』に大洋への出口を一切封鎖することができるのだ。

そうツァーリズムは勘考する、そして前述の如くこの勘考は狭い帝國主義の立場からのみならず、全般的帝國主義の立場から見ても正當である。ツァーリズムは自由主義者やブレハノフ、ポトレソフの徒よりも、ヨリ多く知り、ヨリ廣く見てゐる。

それ故に吾々は明日か明後日になれば、多分三國君主の次ぎの如き宣言を読むにいたるだらう『わが愛すべき人民の聲に聽いて、吾々は平和の恩恵を興へて、休戦を締結し、全ヨーロッパ平和會議を召集することに決した。』加之この場合三國君主は、ヴァンデルヴェルドやブレハノフ、カウツキーの文句の斷片をその宣言の中に繰返へすなら、全く善い子になることもできると言ふものだ。曰く、吾々は軍備縮少と『永久平和』との問題を検討することを『約束』すると。(約束といふものはこの氣狂じみた物價騰貴の時代にあつて唯一の安價なものである。)ヴァンデルヴェルドや、ブレハノフ、カウツキーは平和會議が開かれる同じ都市に、『社會主義者』の大會を大急ぎで召集

するだらう。空しい希望、甘い文句、『祖國』を擁護する必要の斷言が、あらゆる國語で際限なく聞えるだらう。芝居はそう下手でなく演じられるだらう——ドイツに對する帝國主義的英露同盟から、イギリスに對する同じく帝國主義的獨露同盟への移り行きを隠蔽するために！

この戦争が最近の將來においてこういふ具合に終局するか、乃至はロシアがドイツに打ち勝ちオーストリアをもつと掠奪する努力を、なほ幾分永く『固執』するか、それとも單獨講和に關する交渉が、老練なる掠奪者等の單なる馳引の役をつとめるだけになるか(ツァーリズムはドイツとの條約成案をイギリスに示して言ふだらう、これ／＼の數十億ルーブルとこれ／＼の讓歩または擔保を興へよ、然らずんば明日はこの條約に署名すると)——このいづれの場合にしても帝國主義戦争は、帝國主義平和以外の何物を以ても終局し得ない、——この戦争が、社會主義のための、ブルジョアジーに對するプロレタリアートの×××化するのではない場合は。この最後の成行を除いていづれの場合にも、帝國主義戦争は弱小國(セルビア、トルコ、ベルギー等)を犠牲にして三つの帝國主義最強國、即ちイギリス、ドイツ、ロシア中の何れかの勢力を強めることになるだらう、そしてこの際右の三大強國が獲物(植民地、ベルギー、セルビア、アルメニア)を分配し

終つた後に、この三大強國のすべてが勢力を強めるようになることは全く可能なことであつて、その場合、如何なる割合にこれらの獲物を分配すべきかといふ點を中心のみ、すべての争ひが行はれるだらう。

いづれの場合にも卒直公然たる排外社會主義者、即ちこの戦争における『祖國擁護』を直截に認めてゐる臣民にしる、假装せる半排外社會主義者、即ち一般的に『勝敗なしの』平和を説教してゐるカウツキー派にしる、愚弄され欺瞞されるようになることは、避け難いことであり、全く疑ひのないことである。この戦争を始めた當の諸國政府、または一般にブルジョア政府によつて締結される平和は、あれやこれやの社會主義者が如何に帝國主義の奴隷の役をつとめてきたかをすべての國民に公然と示すであらう。

この戦争の終局が如何様なものであらうと、唯一の社會主義的出口は、社會主義のためのプロレタリアートの××××××××××、み可能だと語つた人々の言が正當であつたことが、證據立てられるだらう。××××××××××××××、その完全なる

は『如何なる場合も』一希望ましいことだと語つたロシア社會民主主義者の言が正當であつたことが、證據立てられるだらう。けだし歴史

は決して停止せず、現在の戦争中にも進行するからである。そしてヨーロッパのプロレタリアトが現在はまだ社會主義へ移ることができず、最初の帝國主義大戦争中に排外社會主義者およびカウツキー派の束縛を現在まだ脱することができないとしても、ヨーロッパおよびアジアは、××××××××××××××××××××、即ち半封建的種類の帝國主義政策を運用するあらゆる可能性がツァーリズムから取り去られる場合のみ、長足の進歩を以て民主主義に向ふだらう。

戦争は一切の力弱いもの——排外社會主義とカウツキー主義とをも含めて——を打ち敗り、打ち殺すだらう。これに反して帝國主義平和は、これらの力弱いものを、一層公然たるもの、一層有害なもの、一層アケスケなものにするだらう。

全體で十名の『社會主義』大臣

一九一六年十一月六日。(『ソチアル・デモクラット』第五六號所載。)

國際社會主義事務局(インタナショナル本部)幹事ユイスマンは、デンマルク無任所大臣にして、『社會民主黨』といふものゝ指導者たるスタウニングに對して、次ぎの如き祝電を送つた。『予は新聞紙によつて貴下が大任に任命されたことを知つた。心からの祝賀を表す。これで吾々は世界に全體で十名の社會主義大臣を有してゐる。時世は進みつゝある！ 深厚なる敬意を表す！』

時世は進みつゝある、これは争ふべからざることである。第二インタナショナルは急速に國民的自由主義政策との完全なる一致に向ひつゝある。ドイツの極度の日和見主義者および排外社會主義者の鬭争機關、ヘムニッツの『フォルクスステンメ』は右の電報を掲げて、全然惡意なしではなく次ぎの如く述べてゐる、『國際社會主義事務局幹事は一人の社會民主主義者が大臣の位地を占めたのを、何の保留なしに祝賀してゐる。だが戦争の少し前には、あらゆる黨大會とインタナショナル大會とが、これに激烈に反對を聲明してゐた！ 時世は變つたものだ——そして意見も——この點に關する限りは。』

ハイルマン、グヴィッド、ジューデクムは、ユイスマン、ブレハノフ、ヴァンデルヴェルド等の肩を叩いて輕蔑してやる權利が充分にある……。

この程スタウニングは、フランス排外社會主義に對する親獨排外社會主義者の冷笑に充ちた、ヴァンデルヴェルド宛ての書簡を公けにした。スタウニングはこの書簡で就中次ぎの如く言つて感張つてゐる、『吾々(デンマルク黨)は、イタリアおよびスキスの黨の發起で謂はゆるチンマーワルト派の中に代表されてゐる陰謀家等の反組織的仕事から、斷然手を切つた。』文字通りこゝ言ひ放つたのだ！

民族國家の形成はデンマルクでは十六世紀のことであつた。デンマルク民族の大衆は當時すでにブルジョアの解放運動を、ずつと昔に通り抜けてゐた。デンマルクでは人口の九割六分以上が、デンマルク生まれのデンマルク人である。ドイツにはデンマルク人はやつと二十萬人しか存在してゐない。(デンマルクの人口数は二百九十萬人である。)従つて『獨立民族國家の創立』が今日の任務だといふ、デンマルク・ブルジョアの話が、如何に赤裸々のブルジョアの騙りであるかを、右のことから認めることができる。しかもデンマルクはドイツに生活するデンマルク人數と殆んど匹敵する人口數の植民地を、左右してゐて、デンマルク政府がこの植民地を取引してゐる、そつといふデンマルクのブルジョアと王制主義者とが、二十世紀に右のようなことを口にしてゐ

るのだ

現代ではもはや人間の取引を營んではゐないとは誰が言つたか？ 人間の取引が行はれてゐるしかも活氣のある取引が行はれてゐる。デンマルクはアメリカに、三つの島——勿論みな人が住まつてゐる——を、何百萬かの金（その値段はまだ極まつてゐない）で賣つてゐる。

その外デンマルク帝國主義の一つの特徴は、ミルクおよび肉類生産物における市場の獨有利な地位——即ち最低廉の海路によつて世界の最大市場たるロンドンに商品を販賣してゐるといふ點——から、格別の利益を得てゐることである。その結果デンマルクのブルジョアと富農（これはロシアのナロードニキの説法にも拘らず生粹のブルジョアだ）とは、イギリスの帝國主義ブルジョアの『繁榮なる』亞流と化し、特別に安樂な、特別に豊饒な利潤に與かるその共同營業者と化した。

デンマルク『社會民主』黨は、こゝにいふ國際的事情に完全に征服されてしまつた。そして繁榮と墮落とを以てドイツ社會民主黨の右翼、日和見主義者に隸屬してゐたし、今もなほ隸屬してゐる。デンマルク社會民主主義者はブルジョアの王制的政府の起債に協賛した——『中立を擁護する

ために』といふ人聞きのよい言葉で。一九一六年九月十六日の大會では、九分通りの多數が入閣に賛意を表し、政府との情意投合に賛成した！ ベルン社會民主主義新聞の通信員は、デンマルクでゲルソン・トリエルと主筆のイー・ペー・ズンドボーとが、入閣主義に對する反對派を代表したと報道してゐる。トリエルは美事な演説で××マルクス主義的意見を擁護し、黨が内閣に代表者を送ることを決議した時に、中央委員會と黨とから脱退した。彼れはブルジョア黨の一員たることを欲しないと聲明した。この數年間はデンマルク『社會民主』黨は、ブルジョア急進派と少しも違ひがなかつたのである。

同志トリエルに敬意を表する！ 『時世は進みつゝある』、ユイスマンの言つたことは正當である——××プロレタリアートの大衆の代表者たる××マルクス主義者と、帝國主義ブルジョアの同盟者にして代理人たるブレハノフ・ポトレンフ・ユイスマンとの、奇麗サッパリの、明白な、政治的に正直な、社會主義的に必要なる分離に向つて時世が進んでゐるのだ。後者は多分『指導者』の多數を包含してはゐるが、抑壓さるゝ大衆の利益を代表せず、ブルジョアの仲間入りをした特權労働者の小數者の利益を代表してゐるのである。

ロシアの階級意識ある労働者、シベリアに送られた代議員を選出した彼れ等、帝國主義戰爭維持のための戦時工業委員會への参加に反対した彼れ等は、十名の大臣の『インタナショナル』に属することを欲するだらうか？ スタウニングのインタナショナル、トリエールが脱退したインタナショナルに？

世界政策における一轉向

一九一七年一月三十一日。(『ソチアル・デモクラット』第五八號所載。)

平和主義にとつて好機が来たかのように見える。中立國の有徳なブルジョアは雀躍して曰く、『吾々は戦争利得と物價騰貴とで十分に富を積んだ。これで充分ではなからうか？ おそらくこの上にはもう利得を取り込むことはできない、それに民衆は多分終局まで我慢することができま

す。』……

イタリア社會黨はたつた今キエンタールで、平和社會主義の完全なる破産に關する公式の且つ堂々たる決議を採用した、この社會黨の聲明書を今ウィルソン『自身』が『釋義』してゐるのを見て、平和主義ブルジョアはどうして雀躍せずに居られようか？

ツラチが『アヴァンチ』紙で、彼れ等の、イタリア製の『社會主義的でもある』平和主義的文句を、今ウィルソンが釋義^{パフレイズ}してくれてゐるのを見て凱歌を奏してゐるのは、何の不思議があるだらうか？ フランスの平和社會主義者とカウツキー主義者とが、『ル・ポピュレール』紙においてツラチと愛情濃やかに『一致』し、またカウツキーと一致してゐるのは、何の不思議があるだらうか？ カウツキーはドイツ社會民主主義新聞に、特別に間拔けな五篇の平和主義論説を掲げて、出來事によつて當面の問題化された結構な民主主義的平和の饒舌を『釋義』^{パフレイズ}してゐるのは言ふまでもな

5。

そしてこの饒舌は現在或る客觀的根據を有してゐる點で、特に從來の饒舌と事實上相違してゐる。この客觀的土臺は、諸國民に最大窮迫をもたらし、ブレハノフ、アルベール・トーマ、レーギエン、シャイデマン等の諸氏による、社會主義に對する最大の裏切りを齎したところの帝國主義戦争から、結構な言葉や半分の改良や半分の讓歩といふイカサマものを、諸國民に對して贈るところの帝國主義平和へ、世界政策が轉向したことによつて生じたものである。

この轉向は始つてゐる。

何時この帝國主義平和がやつてくるだらうか、それまで戦争が如何なる變化を闊みするだらうか、この平和の細目は如何なるものだらうかといふことは、今の時機には知ることを得ない——そして帝國主義政策の指導者、即ち金融王と××的××ですらも、これを精密に確定することはできない。平和に向つて轉向しつゝあるといふ事實が重要であり、この平和の根本性質が重要である。然るにこの二つの事情は、今までの事件の發展によつて既に充分に明白にされてゐるのである。

この二十九箇月の戦争において、兩聯合國群の手並みは充分に確定された。一個の嚴然たる權力を意味するところの、近しい『隣人』間のすべての、または殆んどすべての連累が戦闘に引き入れられ、陸海軍は彌が上にもその實力を吟味され、彌が上にもその優劣を比較された。金融資本は數十億の利得を懐に入れた。山の如き戦債は、プロレタリアートと無産階級とが、いかに賃銀奴隸とはいへ數百萬の自分等の兄弟を、帝國主義獲物の分配のための戦争で××することを許可された代償として、國際的ブルジョアジーに對して、今後數十年間を通じて支拂は『ねばならぬ』貢物の大きさを示すものである。

現在の戦争の力をかりて賃銀労働の労働獸をモット絞り取ることは——おそらく今やこれ以上は不可能である。この點に、現在目撃される世界政策の激變の隠れたる原因の一つが存する。これ以上絞り取る事は不可能である、でなければ絞り取りの資源そのものが涸れつくすからである。アメリカの十億長者とオランダ、スウェーデン、デンマークその他の中立國のその弟たちとは、黄金の泉が涸れ始めたことを認め出した——こゝに中立國平和主義の勢力の増大の原因が存するのであつて、この原因は、無邪氣な、憐れむべく笑ふべきツラチ、カウツキー一味が考へてゐるよう

崇高な人道的感情に存するのではない。

なほそれに加ふるに大衆の不滿と憤激との増大がある。吾人はグチコフとヒルファーディングとが革命を恐怖してゐる事を立證する、兩人の證言を嘗つて掲げたことがある。今や第一回の帝國主義的殺戮の片をつける時機ではないか？

このように、休戦を強要するところの客觀的條件は、戦時利得に飽滿せるブルジョアジーの階級的本能と階級的打算との作用によつて相ひ補はれる。

こゝに經濟的激變に基く政治的激變は二つの首要線を辿つてゐる——即ちドイツは自己の主敵たるイギリスを、その同盟諸國から、次ぎの二様の事情によつて引き離してゐる。即ち一は、最もひどい打撃を加へられてゐるのは（または尙ほ打撃を加へられ得るのは）イギリスでなく、その同盟國であるといふ事情であり、他は、すでに極めて多大なるを奪ひ取つたドイツの帝國主義は、イギリスの同盟諸國に半ば讓歩を行ひ得る地位にあるといふ事情である。

ともあれドイツとロシアとの單獨講和が締結されてゐることは可能である。たゞこの場合兩國間の政治的協定の形式が變化したにすぎぬ。ツァールはウィルヘルムに向つて次ぎの如く言ひ得た

『予が單獨講和に公然と署名するとすれば、貴下は明日場合によつてはグチコフ政府やミリュートコフとケレンスキーとを相手にしなければならぬようになるかも知れぬ。といふのは革命が増大しつゝあるからであつて、軍隊の將官連はグチコフと連絡を取つてをり、士官連は昨日まで中學生だつた、そつといふ軍隊に對して予は安全を保證するわけには行かぬ。予は王位を失ひ、貴下は契約の相手を失ふといふ危険を吾々は賭してゐるのだから、お互ひに自分持ちの費用で事を運ぶわけには行かないではないか？』

直接または間接にそつといふことを言はれたとしたら、ウィルヘルムは次ぎの如く答へたに相違ない、『勿論のことだ、吾々は自腹を切らずにやれるだらう。そつだ、公然の單獨講和や紙に書かれた講和を、吾々は何のため必要とするだらうか？ もつと別な、もつと氣のきいた方法で、これと同じことを成し遂げることができないだらうか？ 予は平和の歡喜で人類を祝福するといふ提議を以て、公然と全人類に向ふだらう。そしてフランス人に對しては、予はアフリカのフランス植民地を讓渡してくれれば、フランス國およびベルギー國の全部、または殆んど全部を、いつでも返還するといふ意志を内密に知らせるだらう。これに反してイタリア人に對しては、オース

トリアのイタリア諸州の『一片』と雖も、同じくバルカン半島上の一片の土地と雖も、自分の手に入るなどゝ期待してゐては間違だといふことを知らせるだらう。予は予の提議や計劃が諸國民に知られるように取り計らふことができる、そつすればイギリス人は今後その西歐同盟諸國を維持してゆけるだらうか？ ルーマニア、ガリシア、アルメニアは吾々お互ひの間に分けることにしよう。だがコンスタンチノーブルは、わが尊敬すべき兄弟よ、足下はどうしたつて手に入れることはできないだらう！ そつてポーランドも！』

こつといふ相談が事實上に行はれたか否かは知ることはできぬ。しかしそれは肝心な點ではない。肝心な點は、物事が丁度そつといふ具合に運んだといふことである。ツァールがドイツ外交官のこつといふ論據に不同意を聲明したとしたら、ルーマニアにおけるマッケンゼン軍の『論據』は、ツァールにもつとハッキリ分らせるように作用したに相違ない。

ロシアと四國同盟（即ちドイツ、オーストリア、ブルガリア同盟國）との間の、ルーマニア分割計劃のことは、ドイツの帝國主義新聞紙にすでに公然と述べられてゐる！ そつて饒舌漢エルヴェはすでに秘密をしやべり散らしてゐる。『吾々は現在即座にベルギーおよびフランスを取り

帝國主義に奉仕してゐる。

帝國主義ブルジョアジーは双方の種類または色彩の家來を使用する。ブレハノフの徒を——『侵略者を倒せ』といふ叫びによつて、戦争の繼續に拍車を與へるために使用する。カウツキーの徒を——平和に對するお追従で以て、餘りに激昂せる大衆を慰安するために使用する。

そしてこの故に、あらゆる國々の排外社會主義者と平和社會主義者との全般的一致は決して偶然でなく、この兩方の流派——そして兩方の『社會主義』——の原則的一致の表はれにすぎないものであつて、この兩者の全般的一致は、即ちベルンにおける國際社會主義委員會の回章が語つてゐるように、全般的な『社會主義に對する呪ひの誓ひ』であり、吾人が今まで度々論及してきた『一般的大赦』を意味するものである。ブレハノフがシャイデマン一味の裏切りをガミガミ言ひながら、その時が来るようになる、いち早く平和を説き、これらの諸氏との協同一致を説き廻るのは決して偶然ではない。

然しながら——讀者は異議を挾んで言ふだらう——帝國主義平和は『とにかく』帝國主義戦争よりも善いものであること、民主主義平和の綱領が全部が實現され得なくとも、『可能なる限り』

『部分的』に實現され得ること、獨立のポーランドはロシア領のポーランドよりも善いこと、オーストリアのイタリア諸州をイタリア本國と合併することは一歩前進であること、さういふことを吾々は忘れ得るだらうか？

ツラチヤカウツキーの擁護者は、こゝにいふ種類の考察のかけに身をかくしてゐる。そしてこれによつて彼れ等が××マルクス主義者からブルジョア的俗流改良主義者に化したことに氣づかないのである。

ビスマルクのドイツとその幾多の社會的法律とは、一八四八年以前のドイツよりも『善い』こと、ストリピンの改革は一九〇五年以前のロシアよりも『善い』ことは、苟くも常識ある人間なら否定することができるだらうか？ しかしながらドイツの社會民主主義者（當時は彼れ等はまだ本統の社會民主主義者だつた）は、こゝにいふ論據に立つてビスマルクの改革に賛成しただらうか？ その黨派の一員たるマルトフですら今日輕蔑の念を以て遠ざかつてゐるところの、ポトレソフ、マクローフ一味諸君のことは當然論外として、當時ロシアの社會民主主義者は、ストリピンの改革を辯護または少くとも支持したらうか？

歴史は反革命中にも停止しない。先行の数十年間の帝國主義政策の繼續であつた帝國主義戦争の時期の間にも、歴史は進歩する。前世紀の六〇年代および七〇年代には自由競争の指導的進歩的力たり、二十世紀の始めに獨占的資本主義、即ち帝國主義に成長したところの世界資本主義は戦争中にも、金融資本のヨリ大なる集積に向つてのみならず、國家資本主義への轉化に向つても普段通りに一歩前進を行つた。民族的結合の力強さ、民族的交感の重要さを、この戦争において一方の側の帝國主義的聯盟の中でアイルランド人が、そして他方側の聯盟の中でチェック人が示してきた。帝國主義の聰明なる指導者は言ふ、吾々は小民族の××なしには吾々の目的を勿論實現することはできぬが、茲に二種の抑壓がある。政治的獨立國家を創立して——その財政的隸屬は『吾々』が世話を見るだらう——それによつて卒直な正直な『祖國擁護論者』を贏ち取る方が、安全な——且つ有利な——場合がある。帝國主義列強の眞剣な戦争においては、獨立國ブルガリアの同盟者たる方が、隸屬國アイルランドの主人たるよりも有利である！民族的改革の領域における未完成のものを完成することは、往々帝國主義的聯盟を内面的に鞏固にし得る——この事情は、たとへばドイツ帝國主義の特に卑しむべき使用人の一人、カー・レンナーが正當に考察してゐる。

る。この人間は、勿論いふまでもないことだが、一般には社會民主黨の『一致』、特別にはシャイデマンおよびカウツキーとの一致に、徹頭徹尾賛成してゐるものである。

物事の客觀的成行きは、なすべきことを行つてゆく。そして一八四八年革命と一九〇五年革命の抑壓者は、或る意味では各々その革命の遺言執行人だつたように、帝國主義的殺戮の支配人も或る國家資本主義的改革、或る民族的改革を實行することを餘儀なくされた。そのためには、戦争と生活難とのために憤激してゐる大衆を、小さな讓歩で以て慰撫しなければならぬ——それなのに彼れ等に對して、どうして『軍備縮小』を約束してはならないのか（これを部分的に實行してはならないのか——しかもそれは何等責任を負はないものであるのに！）。けだし戦争は山林經營に類似せる一の『産業部門』である。充分に大きな樹木が續生するに至るまでは數十年を要する……これは恰かも、充分な數の、且つ成長せる『大砲の餌食』が現存するまでには、矢張り數十年を要するのと似てゐる。そしておそらく數十年のうちに、『一致的』な國際的社會民主黨の胎内に、新たなブレハノフ、新たなシャイデマン、新たな甘つたるい妥協政治家——新たなカウツキーの徒が生長することだらう。

る部分が事實上に實現されるか、また労働階級の引續いての闘争に、少くとも何か有益なものが賦與されるか否かは、その時の××

次第で決まるだらう。また×××××が成功した場合は、ヨーロッパにおける社會主義の勝利も、ドイツとロシア、イギリスとの戦ひ、或ひはロシア、ドイツとイギリスとの戦ひ、乃至は合衆國とドイツ、イギリスとの戦ひにおける非帝國主義的停戦の實現も、持續的な、眞に民主主義的な平和の締結も、一にその時の××で決まるであらう。

ユニウス・ブロシューレについて

一九一六年十月。(『ソチアル・デモクラット』合集第一號所載。)

遂にドイツにも戦争問題を扱つた小冊子^{フロンツォーレ}が、違法的に、卑しむべきユンケルの検閲に従はずに現はれた。この著者は明らかに黨の『左翼急進派』に屬してゐるのであるが、この小冊子にユニウス(ラテン語で『年若きもの』の意)といふ署名をして、これに『社會民主主義の危機』といふ名を附した。附録にはベルンの國際社會主義委員會に提出されて、委員會の紀要第三號に掲載されたことのある『國際的社會民主主義の任務に關する論策』^{アヒゼ}が轉載されてゐる。この『左翼急進派』は『インテルナチオナル』團體に屬するものであつて、この團體は一九一五年にこの標題で雑誌を發行し(クララ・ツェトキン、メーリング、ローザ・ルクセンブルグ、タールハイマー、ドンカー、シュトレーベル等の寄稿を以て)、また一九一五—一六年冬には社會民主主義者の會議を催して右の論策^{アヒゼ}を採用し、この會議にはドイツのすべての部分から代議員が參加した。

この書は、一九一六年一月二日附の序文に著者が語つてゐるところによれば、一九一五年四月に書かれたものであつて、それを『何等改修を加へず』印刷せるものである。もつと早く發表される筈のところ^{アヒゼ}が『種々の外部的事情』によつて妨げられた。この書は『社會民主主義の危機』よりも、むしろ戦争の解剖や、この戦争は國民解放の性質を有するといふ傳説に對する反駁やこ

の戦争はドイツから見ても他の列強から見ても帝國主義戦争だといふ證明や、更らに官認諸黨の態度に對する革命的批評や、そういふものゝ方を餘計に取扱つてゐる。極めて潑刺たる調子を以て書かれてゐる此のユニウスの書は、ブルジョアジーおよびユンケルの味方になつたドイツ社會民主黨に對する闘争において、疑ひもなく偉大な役割をつとめてきたし、またこれからもつとめるだらう。これに對しては吾人は著者に滿腔の祝意を表するものである。

一九一四—一六年に外國においてロシア語で公けにされた社會民主主義文獻に通じてゐるロシア人の讀者には、このユニウス・プロシュレー(ユニウス小冊子)は何等原則上新たなるものを提供してゐない。この書を読んで、たとへばわが黨の中央委員會の宣言(一九一四年九月—十一月)、ベルン決議(一九一五年)やその數多くの註解文に書かれてある事柄を、ドイツ××マルクス主義者の議論と比較するときは、ユニウスの立論が極めて不完全なことゝ、ユニウスが二つの誤謬を犯してゐることゝを知る。以下ユニウスの缺點と誤謬とに對する批評を述べるが、それは——殊にその點を力説しなければならぬ——マルクス主義者に必要な自己批評のためと、第三インタナショナルの觀念的土臺を成すべき諸見解に對する、あらゆる方面からの検討のためにすぎないので

ある。ユニウス・ブロシューレは全體としては卓越せるマルクス主義的勞作であつて、その缺點は或る程度までは偶然的性質のものであると云つて差支へないものである。

ユニウス・ブロシューレの主要缺點と、合法的(發行後即座に禁止されたが)雑誌『インテルナチオナル』と比較して一步退却してゐる點とは、排外社會主義(著者はこゝにいふ術語をも用いてゐなければ、比較的正確でない愛國社會主義といふ表現をも用ひてゐない)と日和見主義との相互關係について緘黙してゐる點である。著者はドイツ社會民主黨の『降服』と崩壊のことや、その『公式指導者』の『裏切り』のことについては全く正當に語つてゐるが、それ以上のことを述べてゐない。然るに『インテルナチオナル』は『中央派』即ちカウツキー派に對する批評を與へてゐたし、また中央派の無性格、マルクス主義に對する冒瀆、日和見主義者に對する幫間的態度を罵つてゐた。そして同じくこの雑誌は、たとへば一九一四年八月四日に日和見主義者がどんな場合にも戦費を協賛するといふ決議を提げて、そゝいふ最後通牒を提げて起つたといふ、極めて重大な事實を公けにして、日和見主義者の眞の役割の暴露を始めた。然るにユニウス・ブロシューレとその論策^{テーゼ}には、日和見主義についても、カウツキー主義についても一言も述べてゐない!

これは理論的には當を得てゐない。といふのは、第二インタナショナル全體の歴史を成してゐるところの、長い歴史に亘つてゐる一つの流派としての日和見主義と關係させずしては、『裏切り』を説明することはできないからである。またこれは實際的および政治的にも間違つてゐる。といふのは、公然たる日和見主義(レーギエン、ダヴィッド等)および隱密の日和見主義(カウツキー一味)といふ兩つの流派の意義と役割とを説明せずしては、『社會民主主義の危機』を理解することも、克服することもできないからである。これは一九一六年一月十二日に『フォルヴェルツ』に現はれたオットー・リューレの歴史的論説と比較すれば、一步退却である。リューレはそこにドイツ社會民主黨における分裂の避くべからざることを卒直且つ自由に立證してゐる。『フォルヴェルツ』編輯部は甘口の大嘘のカウツキー式文句で以てこれに答へただけで、すでに二つの黨が存在してゐるといふこと、これを調停することは不可能であるといふことに對して、何一つ肝心の議論を述べることができなかつた。このことは驚くべき不徹底である。といふのは、『インテルナチオナル』の第十二論策^{テーゼ}の中には、『主要諸國の社會主義黨の公式代表者の裏切り』と、その『ブルジョアの帝國主義政策の地盤への移行行きとの結果』、『新』インタナショナルの必要なることが直截に

述べられてゐるからである。ドイツの舊社會民主黨、即ちレーギエン、ダヴィッド一味と妥協してゐる黨を、『新』インタナショナルへ参加させることを論ずるとしたら、只もう笑ふべきことであることは言ふまでもない。

吾人は『インテルナチオナレ』團體のこの退歩が何に基いてゐるかを知らぬ。ドイツにおける××マルクス主義者全體の最大の缺點は、系統的に自己の道を通り、新しい任務の精神を以て大衆を教育すべき斷乎たる×××の缺如である。此くの如き組織をつくつて、日和見主義に對してもカウツキー主義に對しても、ハッキリした態度を取るべきであらう。最近の兩日刊新聞、即ち『ブレーメル・ピュルガーツァイツング』とブラウンシュワイヒの『フォルクスフロインド』とが、今日兩つともカウツキー派の手に移つて、×××社會民主主義者の手から離れてゐるのだから、右の組織は一層必要だといひ得よう。『ドイツ國際的社會主義者』(I. D. D.)の團體のみが、依然としてあらゆるものに對して、明瞭且つ精確に態度を定めるといふ立場を取つてゐる。

『インテルナチオナレ』團體の二三の所屬員は、明らかに無原則的カウツキー主義の泥沼に再び墮ち込んでゐる。たとへばシュトレーベルは『ノイエ・ツァイト』においてベルンスタインとカウツ

キーに對して平身低頭するところまで行つてゐる！そして極く最近の一九一六年八月十五日には、『平和主義と社會民主主義』といふ標題で論説を新聞に發表して、カウツキー流の胸糞のわるい平和主義を擁護してゐる。然るに一方ユニウスはといへば、カウツキー的目的論見に對して、『軍備撤廢』『秘密外交の廢止』等の精神を以て斷乎として反對してゐる。これによつて見れば、インテルナチオナレ』團體の中には二つの流派があること、一は革命的であり、一はカウツキー主義に傾いてゐることは、今や包むことはできなくなつた。

ユニウスの間違つた主導命題のうちの第一のものは、『インテルナチオナレ』團體の第十五論策テシゼに基いてゐるものである。……『その奔放なる帝國主義の時期にあつては、もはや國民戦争はあり得ない。國民的利益なるものは、勞働民衆をその仇敵たる帝國主義に奉仕させるための欺瞞手段にすぎない。』……こゝにいふ命題を以て終つてゐる第十五論策の發端は、現在、戦争を帝國主義戦争として特徴づけることに宛てられてゐる。現在の戦争が帝國主義戦争であつて國民戦争ではないといふ、全く正しい思想を力説すると同時に、一般的に(帝國主義時期に)國民戦争を否定することは、見誤りであるか乃至は偶然の手落ちであるかも知れぬ。しかしその反對の場合もあり得